

四、旅上詩人

一、東海・近畿・濃尾地方の行脚

貞享元年八月—同二年四月

貞享元年八月、芭蕉は門人千里を伴つて深川の芭蕉庵を出立した。目的は歸郷である。素堂の説に、ふるさとのふるきをたづねん序に、云々とあるが、母の法事のためであらう。法事のために歸郷して、親戚・故舊とも逢つて來ようといふのである。千里は苗村氏、大和葛下郡竹ノ内の人。江戸に出で、淺草に住み、通稱油屋喜左衛門と云つた。禪を好み、又損居士と號し金持だつた。常に「莫逆の交深く、朋友に信ある哉此人」と芭蕉も賞めてゐる。

野ざらしを心に風のしむ身哉  
秋十とせ却て江戸を指す古郷  
深川や芭蕉を富士にあづけゆく  
李下の餞別吟に、

千里

芭蕉野分其句に草鞋かへよかし

李下

月と紅葉を酒の乞食

芭蕉

随分貧しい旅行だつたと見える。

鎌倉より江ノ島一見なども此時だらう(冠山の全集、宗周説)とあるが詳かでない。箱根の關を越える日は雨が降り、山は皆雲にかくれる。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

富士川の邊で捨子を見付け、汝が性の拙きを泣けと云つて、袂から食物を投げてやる。猿を聞く人捨子に秋の風いかに

旅上詩人

捨子を見捨て、行つた態度から、芭蕉の人格を罵る者もあるやうであるが、それは無理であら



う。これから遠い旅を抱へてゐる境遇だし、金は無いし、乳飲み子を抱いて行けるものではない。この附近に知人でもあれば、事情を話して何とか頼んでも見ようがあてもない。ただ子供の運命に深く同情しながら別れて行くより外はなからう。芭蕉もこれ迄に随分苦勞した人である。常識もあり、分別もあらう。情に溺れて自分も難儀し、子供も苦しめる愚は學ぶまい。打捨て、行くのが此場合賢明である。併し涙はある。天を怨みたくもなる。食物を投げて通る、此氣持が詩人らしくてよい。造化に従つて、造化にかへる、之が芭蕉の人生觀であつた。

大井川を越える日は終日雨に降られ、

秋の日の雨江戸に指折らん大井川

千里

馬上吟

道のべの木槿は馬に食はれけり

甲子吟行の素堂の序詞に、「此吟行の秀逸なるべけれ。」とある。又許六の滑稽傳に、「日々向上にすり上げ、終に談林を見破り、はじめて正風體を見届け、……道野邊の木槿は馬に喰はれたりと申されたり。云々」ともある。

二十日餘りの月を見て、小夜の中山を越える。

馬に寝て残夢月遠し茶のけむり

伊勢に至り、松葉屋風瀑(麥)を訪れ、十日ばかり泊る。風瀑は伊賀上野の人、小川次郎大夫、梢風尼の父である。

日暮に外宮に參詣したが、形が僧侶のやうであるから、神主が内に入れてくれない。芭蕉は殘念がつてゐた。

みそか月なし千とせの松を抱くあらし

西行谷で女の芋洗ふを見て、

芋洗ふ女西行ならば歌詠まむ

山田住の雷枝亭で、此句に和して、俳諧興行。

宿まるらせむ西行ならば秋の暮

雷枝

芭蕉と答ふ風のやれ笠

翁

芋洗ふ女を見た日の歸途、或茶店に立寄り、てふといふ女から句を所望され書き與へる。



芭蕉の精神

蘭の香やてふの翅にたき物す  
盧牧亭を訪れ、

蔦植ゑて竹四五本のあらしかな

盧牧は伊勢の人、後年芭蕉の死を悼んで、四七日に追悼句を粟津に寄せた。

九月のはじめ故郷にかへり、兄から亡母の白髪の入った守袋を見せられ感泣する。芭蕉は十年足らずも郷里へ歸らなかつたのだらう。母の法事でしばらくぶりで郷里へ歸つて、母の白髪を見せられたから、一層感慨が深かつたものであらう。

それより大和に行き、千里の郷里の竹の内にとゞまる。藪より奥に家があるとは、千里の家だか、他人の家だか詳かでないが、幽栖な所だつたと見える。

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

素堂の序に、此句と前の竹四五本の句とを、とりわけ主人がもてはやしたといふ。

二上山當麻寺に參詣、庭上の老松を見る。

僧朝顔幾死にかへる法の松

ひとり芳野の奥にたどり、麓の坊に一夜を借りて、

碇打つて我にきかせよや坊が妻

西行法師閑居の跡を尋ね、とくくの清水を見て、

露とくくこころみに浮世すゝがばや

秋の日も暮れかゝつたので、名ある所々見残し、先づ後醍醐天皇の御廟を拜み、

御廟年を経て忍ぶは何をしのぶ草

大和から山城を經、近江に入り、美濃路に至り、今須山中を過ぎて常盤の塚を見る。守武の句を思出す。

義朝の心に似たり秋の風

不破

秋風や藪も畠も不破の關

旅上人 大垣に入り、木因を主とする。木因は谷氏、通稱善大夫。大垣の人。木端・白櫻叟と號し、船問屋である。俳學のあつた人で、芭蕉から杭瀬川の翁と尊敬された。季吟門、友人として交は



つたものらしい。芭蕉勘當の弟子也は誤。塔山と句作。

師の櫻昔拾はむ木葉かな

塔山

すゝきに霜の鬘四十一

芭蕉

如行亭に泊る。

霜の宿の旅寢に蚊屋を着せ申す

如行

古人がやうの夜の木枯

芭蕉

如行は近藤氏、大垣の人。戸田侯の臣。晩年名古屋に住む。塔山は荊口の子、荊口は宮崎氏、同じく戸田侯の臣。此筋・千川・文鳥の父である。

伊勢に入る。桑名の本當寺にて、

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

濱の地藏堂に參詣し、

明ぼのや白魚白き事一寸

桑名から船で熱田に來り、桐葉亭に止泊する。桐葉は林氏、七左衛門。熱田市場町の宿屋で

臨高庵・元竹庵の號がある。鳴海の下郷知足の女を妻とする。熱田神社參拜。神前の茶店で、

しのぶさへ枯れて餅買ふ舍かな

芭蕉は、「旅亭桐葉の主、心ざし淺からざりければ、しばらくといふまらむとせしほどに」と前書して、

此海に草鞋捨てん笠時雨

芭蕉

むくも佗しき波のから蝸

桐葉

東藤を入れて三吟歌仙成。

馬をさへ詠むる雪の朝かな

芭蕉

木の葉に炭を吹きおこす鉢

閑水

十月、熱田から名古屋へ入る途中吟。

狂句木枯の身は竹齋に似たる哉

草枕犬もしぐるゝか夜の聲

自分の境遇を尾羽打枯した竹齋老に譬へる位だから、餘程落魄した旅のやうに思はれる。こゝ



で荷兮・野水其他を指導して、冬の日五歌仙を作つた。熱田の桐葉亭には十二月頃迄滞在して  
るたらしく、その間兩所を往來して居たのだらう。

海暮れて鴨の聲ほのかに白し

芭蕉

串に鯨をあぶる盃

桐葉

四吟歌仙である。之れから芭蕉は美濃路へ赴かうとしたが、伊賀から音信があつたので止め  
た。

こゝかしこと遍歴して、貞享元年も暮れた。

年暮れぬ笠着て草鞋はきながら

二十五日伊賀へ入り、山家へ越年して、

誰か聳ぞ齒朶に餅おふうしの年

伊賀には二月中頃迄居て、十四日頃奈良に向つた。

奈良に行く途中、

春なれや名もなき山の薄霞

二月堂に籠つて(十二日夜)、

水取やこもりの僧の杵の音

京に上りて三井秋風が鳴瀧の山家を訪ふ。

梅白し昨日や鶴を盗まれし

椋の木の花にかまはぬ姿かな

秋風は初め宗因門であつたが、宗因の晩年流派を亂すやうな行があつて、宗因門を去り、今蕉  
門に歸したのであるが、去來の言によると、其後招けども行き給はずとあるから、何か人物に  
面白くない所があつたものと思はれる。芭蕉は北村季吟を此時新玉津島社に訪れ、其子湖春を  
連れて、秋風庵に来て、歌仙を卷いてる。

我櫻鮎割く枇杷の廣葉哉

秋風

笥に動く山藤の花

芭蕉

日の霞夜銅の氣を知りて

湖春

京に居た時、六條の旅舎で、千那と會見し、千那は近江堅田本福寺の住僧、法號感應院名は妙



式。初め物本寺高政に學び、官山子と號し、尙白と親しかつた。蕉門に入り千那と改め葡萄坊と云。寶永五年江戸に下り、不角が自娛堂にとゞまる事三年、後奥羽信の諸國を遊歴し近江にかへり、享保八年歿。七十三。「花實は花過ぎたり」と云はれる。

伏見西岸寺任口上人に逢ふ。

我衣に伏見の桃の雫せよ

大津に至る山路を越えて、

山路来て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望

唐崎の松は花より朧にて

二句とも當時稱揚された句である。其角の雜談集に、慥かな切字がないかどうかと或人に質問されて、「おぼろ哉と申す句なるべきを、句に句なしとて、かくは云ひ下し申されたるなるべし。朧にてと据ゑられて、哉よりもなほ徹したるひびきの侍る。云々」と答へてゐる。支考の古今抄には、「是はまさしく哉の治定を恐れて、にてと心に返されけむ。……是はさゞ波に駒

とめて、比良の高根の花を見しよりも、辛崎の松は朧にて面白からんかと心を返して、哉とは決せず、にてと疑へり。云々」と云つてゐる。唐崎の句は大津の尙白亭の吟と千那の本福寺の吟との二説がある。尙白此頃入門か。尙白は鹽川氏、大津の人、通稱虎之助、醫を業とし、江左三益と云。初め貞室門、中頃宗田派の高政門、又高田常矩にも學び、此地方の先覺者で、乙州・正秀・酒堂・曲水などはじめ尙白に師事した。木翁と云ひ、能筆であつた。享保七年歿七十三。許六から彼が調一風面白き胴切れた所があると云はれてゐる。

近江の水口驛で、土芳に逢ふ。二十年ぶりであつた。

命二つの中に生きたる櫻かな

つゝじ活けて其陰に干鱗さく女

吟行

菜島に花見顔なる雀哉

此二句は水口驛へ行く途中の吟か。

芭蕉は近江から尾張へ向つて熱田に入った。前年厄介になつた桐葉亭へ止宿した。景清の屋



數だの、頼朝誕生の舊跡などを見物しようと云つて、桐葉等を誘つて、

つくぐくと榎の花の袖に散る

桐葉

ひとり茶を摘む藪の一つ屋

芭蕉

三月二十七日、桐葉亭で叩端・桐葉と三吟興行があつた。

何とはなしに何やら床し葦草

芭蕉

編笠敷きて蛙聞きる

叩端

田螺わる賤の童のあたたかに

桐葉

伊豆ノ國蛭が小島の僧、芭蕉の名を慕つて尾張迄來る。

いざともに穂麥食はん草枕

此旅僧から鎌倉圓覺寺の大巖和尚の訃を聞き其角に文通する。

梅戀ひて卯の花拜むなみだ哉

芭蕉は熱田の桐葉亭から鳴海の知足の許へ赴いた。

杜若われに發句の思あり

芭蕉

麥穗なみよるうるほひの米

二つして笠する烏タぐれて

知足  
桐葉

再び桐葉の許に戻つて來て、今や東へ下らうとする。留別吟、

牡丹藥ふかく分出づる蜂の名殘哉

桐葉の送別吟、

うきは藜の葉を摘みし跡の獨かな

又杜國に別れの句を書き送る。

白芥子に羽もぐ蜂の形見哉

芭蕉はそれより木會に赴いて、江戸に歸つたやうであるが、果して木會へ行つて、江戸へ歸つたものか詳かでない。甲斐の山中に立寄つた事は事實だが、木會から廻つたものか、直接東海道を下つて甲斐へ入つたものか明かでない。

行く駒の麥に慰むやどり哉

四月の末江戸の芭蕉庵へ入つた。



夏衣いまだ風をとりつくさず

一九八

此旅行は九ヶ月の日子を費してゐるが、名古屋を中心として熱田、鳴海に蕉風の勢力を扶植した事は第一の收穫であつた。冬の日の俳調が江戸、上方に評判された効果は大なるものがあった。

此旅行記を野ざらし紀行と云つて二種の刊本があつた。尤も之は久しく寫本で傳はつてゐて題名さへ定まらなかつた。草枕、芭蕉翁道の記、野ざらし紀行、甲子吟行などとあつたが、野ざらし紀行の名は許六の書に見えてゐるから古く、草枕も許六の自讃之論下（元祿十一年）に出てはゐるが、漫然と旅行記を指した稱呼らしく、題名とする事はどうかと思ふ。甲子吟行といふ題名は、安永九年芭蕉の眞蹟本を模刻出版する時名付けたものであらう。刊本には月下の野ざらし紀行（明和五年刊）と波靜の眞蹟本の模刻は繪を略して、此所山あり、此所川などと記してある。

野ざらし紀行の註本は石河積翠の翠園抄（文化十年刊）の外に余り見ないやうである。尤も輕花坊の泊船集註解の中に野ざらしの註も見えてゐるが、有名なのは前者である。併し翠園抄

は註が不親切で、初學にはむしろ輕花坊の方が分り易いかとも思ふ。

## 二、鹿島の月見

貞享四年八月、芭蕉は曾良、宗波を従へて、鹿島へ月見に行つた。行徳から舟を下りて、甲斐の人から貰つた檜笠をかぶつて、やはたといふ村を過ぎ、かまかいの原に出た。秦旬の千里とも思はれる曠野で、向ふに筑波山が見える。嵐雪の句を思出す。こゝは萩、桔梗、女郎花などが亂合ひ、小牡鹿の妻戀ふ様、野馬の群れ歩く様、とりぐに面白い眺であつた。夕方の利根川べりの布佐といふ所へ着く。宵の内は漁師の家へ入つて休む。月が隈なく晴れたから、夜舟を下して鹿島へ來た。併し生憎午から雨が降つて、月を見る事も出來ない。此麓に根本寺の前住佛頂和尚が隱栖してゐられると聞いて尋ねて行つた。實に靜かな所で、人をして深省を發せしめる趣があつた。明方空が少し霽れたので和尚に起された。月の光、雨の音、ただあはれなる氣色のみ胸に満ちて、何とも云へなかつた。



折々にかはらぬ空の月かけもちづの眺は雪のまじく  
月早し梢は雨を持ちながら  
寺に寝てまことがほなる月見哉  
雨に寝て竹起きかへる月見哉  
月さびし堂の軒端の雨しづく  
鹿島神社参詣、神前で、

この松のみばへせし代や神の秋  
萩原や一夜はやどせ山の犬  
芋の葉や月待つ里の焼畠

歸路本間道説(白準)亭に宿る。

岬せよ藁干す宿の友雀  
秋をこめたるくねの指杉  
月見むと汐引きのぼる舟とめて

和尙

桃青

同

ソラ

宗波

桃青

同

同

松江

桃青

ソラ

此紀行を鹿島紀行と云。刊本には採茶庵梅人の上木したかしま紀行(寛政二年刊)と松籟庵秋瓜の梓行した鹿島詣(寶曆二年刊)とある。前者は芭蕉百回忌の記念として採茶庵(杉風)に傳はつた芭蕉自筆のかしま紀行(拓本)を模刻したもの、後者は常陸潮來村の本間自準亭に傳はつたものを、三代目畫江の世に至り、證治準繩といふ醫書と交換して、秋瓜の模寫出版したものである。

### 三、大和の行脚、姨捨の月見

貞享四年十月——同五年八月

貞享四年十月芭蕉は郷里伊賀のへ歸らうとした。そこで諸門人の送別會が始まつた。九月、内藤露沾の遊蘭堂に於て六吟歌仙があつた。

旅泊に年を越して、芳野の花に心せん事を申す。

時は秋芳野をこめし旅のつと

露沾



雁を友寝に雲風の月

芭蕉

露沾は奥州岩城の城主内藤義泰（風虎）の嫡子義英である。遊蘭堂、傍池亭と號し、初め宗因門。此歳夏頃芭蕉に入門したらしい。

十月、濁子亭で嵐雪、其角等の八吟興行があつた。濁子は中川氏、甚五兵衛、大垣の士、江戸勤番で來てゐたのであらう。

江戸櫻心通はんいく時雨

濁子

薩埵の霜にかへり見る月

芭蕉

同じく舉白亭で其角、嵐雪、コ齋等七吟興行。舉白が芭蕉庵の留守を預つたものか。舉白は草壁氏、江戸の人。其角一派の人。

潮來の道説も錢別興行を催した。九吟、

しろかねに蛤をめせ霜夜の鐘

松江

一羽わかるゝ千鳥一むれ

芭蕉

松江（道悦）は江戸へ出て來たものか。

十月十一日、其角亭に於て其角一派の送別會があつた。其角、枳風、文鱗等十吟であつた。

旅人と我名よばれん初しぐれ

芭蕉

また山茶花を宿くにして

由之

鷓鴣の心ほど世のたのしきに

其角

脇は岩城の住長太郎といふ者であつた。

いよく芭蕉は十月二十五日故郷へ出立する事になつた。舊友、門人の贈物、詩歌、俳句もあれば、草鞋代を包むもの、紙子、綿入、帽子、足袋など恵むもの、實に盛大であつた。杉風は病氣で送れなかつたので、芭蕉の出立を聞き、

鳴千鳥富士を見返れ汐見坂

杉風

と云つた。

今回の旅行のかく迄盛大であつた事は、芭蕉の名聲の貞享元年歸郷時代より高まつてゐたためでもあらうが、一つは貞享三、四の交は芭蕉はとかく病勝ちであつたから、門人もひどく心配して、その行を壯んにしたものであらう。此時の詩歌、俳諧を集めた芭蕉自筆の草稿は、後



寛保四年祇徳の手によつて、句餞別と題して出版された。

此行芭蕉は先づ風羅坊と云つた。例によつて尾張鳴海の知足亭に止まつた。十一月四日である。知足は下郷氏、名は吉親、通稱勘兵衛。尾號を千代食と云ひ、酒造家である。寂照庵、蝸盧亭と號する。貞享二年芭蕉入門。寶永元年歿。六十六。母永參、男蝶羽、女つね、孫女しゆん、蝶羽妻、何れも俳人であつた。

星崎の闇を見よとや啼く千鳥

芭蕉

船調ふる蟹のいさり火

安信

七吟歌仙成。千鳥掛の素堂の序に、「翁おもへらく、此所は名古屋、熟田に近く、桑名、大阪へも亦遠からず、千鳥掛けに行通ひて、殘生を送らんと、云々」とあるから、行脚の便もよい所で、氣に入つたものと見える。五日、本陣寺島氏業言亭に入り、俳諧興行、七吟歌仙、飛鳥井雅章公の和歌を見て、

京まではまだ半空や雪の雲

芭蕉

千鳥しばらく此海の月

業言

十日、三河の保美といふ所に、杜國の忍んでゐるのを訪れようと 越人と共に出立する。越人杜國と三吟歌仙がある。杜國は野人と改め、罪を犯してこゝに流されたものであらう。

麥蒔いてよき隠家やはたけ村

芭蕉

冬をさかりに山茶咲くなり

越人

晝の空蚤かむ犬の寝返りて

野人

伊良古崎一見、たまく鷹を見付け、

應ひとつ見つけてうれしいらこ崎

杜國に名古屋まで送られて、命拾ひして歸る。

いたわりて新井までの間を杜國に送られ行けばかちよりも恐し。

すくみ行くや馬上に氷る影法師

十六日、晴天、越人と共に知足亭に歸る。随分難義な旅行らしかつた。

焼飯や伊良古の雪にくづれけん

知足

砂寒むかりし我足の跡

芭蕉



十七日、笠寺奉納俳諧。七吟歌仙。

笠寺やもらぬいほ窟も春の雨

旅寝を起す花の鐘撞き

十八日、荷兮、野水見舞として知足亭に来る。蕎麥切打つて俳諧。

幾落葉それほど袖もほころびず

旅寝の霜を見するあかがり

二十日、鳴海の鍛冶氏雪亭にて俳諧興行。氏雪は自笑と號し、出羽守、小刀鍛冶。

面白し雪にやならん冬の雨

氷をたたく田井の大鷲

二十一日、熱田の桐葉へ行く。熱田神社参拜。

磨ぎ直す鏡も清し雪の花

石敷く庭の寒きあかつき

桐葉亭止宿中、美濃の好行来り、俳諧興行。三吟。

芭蕉・桃青

知足

荷兮

芭蕉

芭蕉

自笑

芭蕉

桐葉

旅人と我名はやさん笠の雪

盃寒くうたひ飲むなり

其頃箱やうの笈を桐葉にやる。蝶羽の笈、銘がある。

名古屋へ行く。

聽雪亭

箱根越す人もあるらし今朝の雪

昌碧亭

ためつけて雪見るまかる紙衣哉

書林風月堂にて

いざゆかん雪見にころぶ所まで

防川亭

香を探る梅に藏見る軒端哉

各俳諧興行があつた。

如行

芭蕉



十二月十日餘り、名古屋を出て、故郷へ入らうとする。

旅寝して見しや浮世の煤拂ひ

日永の里から馬を借りて、杖突坂を上るうちに落馬し、馬子に叱られる。

かちならば杖突坂を落馬かな

日永の里は、四日市から石薬師の間にある。後郷里に歸つて、伊賀の連中に此脇を所望したら  
土芳が「角のとがらぬ牛もあるもの」と附けたといふ話がある。故郷へかへり、

舊里や臍の緒に泣く年の暮

元祿元年芭蕉四十五歳、飲酒夜更して元日を寝忘れ、

二日にもぬかりはせじな花の春

小川風麥亭にて、

春立つて未だ九日の野山かな

枯芝ややゝ陽炎の一二寸

土芳の蓑虫庵にて、うにといふものを吟じ、

香に匂へうにほる岡の梅の花

阿波庄新大佛寺にて、丈六の尊像の頽廢を見、

丈六に陽炎高し石の上

猿雖に對し

もろくの心柳に任すべし

二月、伊勢神宮參拜。何の木の花、裸にはまだ如月、お子良子の一本などの句作があつた。

菩提山神照寺

此山の悲しさ告げよ野老ほり

龍、尙舎に逢ふ

物の名をまづとふ蘆の若葉哉

神職で、龍太夫と云。博學の人であつた。

網代(足代)民部の息に逢ふ

梅の木になほやどり木や梅の花



於山田俳諧興行

何の木の花とはしらず匂ひ哉

聲に朝日をふくむ黄鳥

益光

益光は山田館町泉館半太夫。益光、又玄等七吟興行であつた。

三月、伊賀に歸り、故主藤堂蟬吟の別葉に於て、弟探丸子（蟬吟の跡をつぐ）に見え、

さまぐの事思出す櫻哉

芭蕉

春の日はやく筆に暮れ行く

探丸子

三月半過ぎ、芳野の花見に約束した杜國と伊勢に逢ひ、杜國は戲に萬菊丸と稱し、師の勞を助ける。笠の内に落書。

乾坤無住、同行二人

芳野にて櫻見せうぞ檜木笠

芳野にて我も見せうぞ檜木笠

萬菊

杜國、芭蕉連署の物七宛の手紙に、「三月十九日伊賀上野を出て、云々とあるから、杜國、芭

蕉は伊勢から伊賀に入り、十九日に大和へ出立したと見える。世に麝の圖といふ芭蕉の戲畫が傳つてゐるが、之は芭蕉が京から猿雖方に交通した時、戲に描いたもので、猿雖亭で畫いたものではないらしい。その圖は杜國の麝を畫いたもので、幅員が四尺七寸もあつたさうだが、傳へる書に依て畫の形の相違するものも變である。郷里留別吟、

このほどを花に禮いふ別れかな

同行者は三人ばかり居つたやうだ。紙衣、合羽、硯、筆、紙、藥の類は必要品だから、物に包んで後に負うたので、後へ引かれるやうで、道がはかどらなかつた。それも六といふ奴僕がこれ迄荷物を擔いでくれたが途中で別れ、いよく重い物を負ふ事になつて困まつてゐると、今度は梅軒といふ男が草臥出して心配になつた。丹波市やぎといふ所に泊る。

ほととぎす宿かる頃の藤の花

後くたびれてに直す。

初瀬に參詣。初瀬寺である。大和國磯城郡初瀬村に在る。本尊十一面觀世音。眞言宗本山である。初瀬の御籠は平安朝時代によく行はれたもので、源氏の玉葛など一例である。



春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

葛城山の麓を過ぎ、一言主ノ神の昔を忍び、なほ見たし花に明け行くといふなつかしい情懷を寄せてゐる。

三輪、多武峰、躰峠、龍門、西河、布引瀧、布留瀧、若清水等の名所舊蹟を探り、種々の吟を得た。

雲雀より空にやすらふ峠かな

龍門の花や上戸の土産にせん

ほろくと山吹散るか瀧の音

櫻狩奇特や日々に五里六里

日は花に暮れてさびしやあすならう

春雨の木下につたふ清水かな

芳野には三日留まつたけれど、結局貞室のこれはくとばかりの句に云ひ盡されて一句も出来なかつた。其角の「明星や櫻定めぬ山がつら」句を歎稱したのも此時であつた。ようやく櫻

川で一句を得て、芳野行の義務をはたした。

人の氣や花に乘行く櫻川

芳野を出て高野山へ行つた。

父母のしきりに戀し雉子の聲

高野を出て和歌の浦へ行く。

行春に和歌の浦にて追付いたり

四月一日、奈良へ向ふ。

一つ脱いで後に負ひぬ衣更

八日、奈良に至り、こゝかしこの寺社に參詣し、鹿の子を産む狀を見て、

灌佛の日に生れ合ふ鹿の子哉

招提寺に鑑眞和尚の盲目の像をあはれみ、舊友に別れて、

鹿の角先づ一ふしの別かな

人 詩 上 旅  
郡山に原田宇古のまろを尋ね、杜國と三吟歌仙成。別に臨み、宇古に頭陀箱を與へる。十日ほど厄介



芭蕉の精神

になる。宇古は郡山の城主本多下野守の家老で、はじめ才丸門。玄々の俳家奇人談に、頭陀箱の圖と其傳を掲げる。因に杜國との三吟歌仙は天明年中火に逢つて焼失して了つた。

大坂へ上り、大江の岸に宿る。一笑亭か。

杜若語るも旅のひとつかな

芭蕉

山路の花の残る笠の香

一笑

それより須磨、明石見物。附近の名所、舊蹟を探つて、明石から須磨に歸つて泊る。

月はあれど留守のやうなり須磨の夏

須磨の海士の矢先に啼くやほととぎす

時鳥消え行く方や島一つ

蛸壺やはかなき夢を夏の月

芳野行脚は貞享四年十月より同五年四月に終つてゐる。その間七ヶ月、世に之を卯辰紀行、

又は芳野紀行と云。刊本は寶永六年乙州が笈の小文と題して出版してゐる。併しその題號は去來の説によると、芭蕉自撰の句集の名で。草稿半にして芭蕉は死んで了つた云々とある。乙州

が芭蕉の句集に定められた題號を取つて紀行文の名とする事は不穩當である。後人の非難も故なきにあらずである。一説に、芭蕉は笈の小文を人に見せなかつたけれど、乙州だけには見せたといふが詳かでない。

須磨から歸つた芭蕉は、二十一日布引の瀧に登り、山崎街道にかかつて、能因塚、能因塚金龍寺の鏡を見、山崎宗鑑屋敷跡で餓鬼つばたの句を思出し、

有難き姿拜まんかきつばた

と云ひ、二十三日京に入つた。竹人の説では、杜國は京より一人伊賀にかへり、猿雖が四五日泊つて、六月二十五日美濃に歸つたとあるが、美濃は少しをかしい。保美の誤であらうか。

京を出た芭蕉は大津へ行つた。乙州の所を宿としたものか。湖中の説に、芭蕉の日記（自筆にて三行ばかり）を引き、「六月六日大津を出、あち川に泊、七日赤坂に一宿、八日岐阜に到る。秋方軒宜白を主とす」とあるがどうだらう。大津から美濃路へ入り、己白の案内で岐阜に入つた事は事實らしいが、六月八日は信じられない。五月の始めかと考へる。笈日記に、

ところ／＼見めぐりて、終に旅寝せしほど、美濃の國よりたびたび消息ありて、桑門

旅上詩人



己白の主道いさいさるべせむとてとぶらひ來待りて

しるべして見せば美濃の田植歌

笠あらためむ不破の五月雨

己白  
芭蕉

とあるから、五月岐阜へ向つたものと思はれる。曠野に、「はじめて葎室をとぶらはれける比」と前書して、

こゝらかとのぞくあやめの軒端哉

秋芳

ともある。秋芳軒入りは五月五日か。前の芭蕉真筆の日記は疑はしいものである。大垣に來た時は旅宿に泊つて居つた。そこへ關の素中が尋ねて來て入門した。

見せばやな茄子をちぎる軒の島

其葉を笠に折らん夕顔

素牛  
芭蕉

素牛（惟然）は廣瀬氏、通稱藤本屋清右衛門と云。若い時庭前の梅花が時ならずして風に散つたのを見て深く感じ、妻子を捨て、隱退した。非常に貧乏な男で、奇行にも富んで居つた。無名庵に泊つてゐた頃、枕に帯を巻いて寝たので、芭蕉から頭に千金を費したのだらうと云つて

笑はれたり、許六からもかながしらにあやかれと冷かされた事もあつた。芭蕉歿後風羅念佛を唱へて歩いた變り者である。鳥落人、梅花佛の號がある。後口語體な伊丹風の句に近付いて行つて同門から罵れた。寶永八年歿。六十餘。

岐阜の落梧（賀川氏）の招に應じて其亭に泊る。瓜島集に、

落梧なにがしの招に應じて、稻葉山の松の下涼みして、長途の愁を慰むほどに、

山蔭や身をやしなはむ瓜島

六月である。稻葉山の麓に住んでゐたと見える。此行尾張の荷兮へ文通して呼び寄せたものか荷兮、越人参加する。同書に落梧亭と題し、

藏のかげかたばみの花めづらしや

荷兮

折りてや掃かん庭の帚木

落梧

七夕の八日は物のさびしくて

芭蕉

稻葉山から長柄川の鵜飼を見る。

又やたぐひ長良の川の鮎なます



面白うてやがて悲しき鶉舟哉  
賀川氏の水樓に上り、十八樓記を作る。

このあたり目に見ゆるもの皆涼し  
落梧の子供の夭折を悼み、

もろき人にたとへん花も夏野哉  
去來の妹千子の死を聞き、去來の許へ追悼句を送る。

亡き人の小袖も今や土用干

十九日、岐阜の芦文亭で俳諧興行。芭蕉、荷兮、越人、落梧、己白、惟然等十五行。

蓮池の中に藻の花まじりけり

水おもしろく見ゆる駕の子

さゞなみや今日ぞ火ともす暮待つて

美濃を立つて尾張鳴海の知足へ行く。重辰、知足等俳諧興行。七月十三日。

初秋や海も青田の一みどり

芭蕉  
荷今  
芦文  
芭蕉  
芭蕉

乗行く馬の口とむる月

裏辰

知足の弟金右衛門の新宅を祝ふ。

よき家や雀よろこぶ背戸の粟

芭蕉

蒜に見ゆる野菊刈萱

知足

二十日、名古屋の竹葉軒長虹亭に於て歌仙興行。芭蕉、長虹、一井等七吟。

粟稗に乏しくもあらず草の庵

芭蕉

藪の中より見ゆる青柿

長虹

後、安永元年名古屋の曉臺、此歌仙に自派の句を入れて秋の日と題して出版した。荷兮の筆で、曉臺門騏六の家に傳はつたものである。

八月、芭蕉は越人と荷兮の好僕を連れて、更科の里姨捨山の月見に行つた。名古屋から岐阜に引返し、木曾街道に入り、稻荷山から八幡村、姨捨と来たものであらう。

送られつ送りつ果は木曾の秋

草いろくおのく花の手柄哉



途中で六十位の道心坊と道連れになつた。腰が曲るまで荷物をしよつてゐるので氣の毒に思ひ、荷物を馬に載せ、その上に芭蕉を乗せた。四十八曲とかいふ峻しい山道で、歩いてゐても目が廻る所を、彼の好僕馬上に居眠り、危く見てゐられない。宿へ着いて燈火の下で句作すると、道心坊旅情の物憂さと早合點し、若い時巡拜した地、阿彌陀様の尊い事など、やたらに話しかけて、やかましくて句も作れず、結局酒にすると、普通の倍もする盃に、而も時繪の晝いてあるものを出され興に入つた。

あの中に時繪書きたし宿の月  
棧や命をからむつたかつら  
十五日、姥捨山の月見。

佛や姥ひとり泣く月の友  
いざよびもまだ更科の郡哉  
十六日、善光寺參詣。  
月影や四門四宗もたゞ一つ

吹き飛ばす石は淺間の野分哉

荷分一行は姥捨月見後名古屋へ歸つた。別れる時芭蕉は土産として杼の實を與へた。

木曾のとち浮世の人の土産哉

二年に渉る旅行も無事に終へて、芭蕉は越人を連れて江戸の芭蕉庵へ入つた。八月末であらう。

姥捨の旅記を更科紀行と云。刊本は杉風の採茶庵に傳はつた更科紀行（寛政十一年刊）がある。外に百我の眞蹟敷寫の更科紀行もある。百我のには庚子（享保五年か）の春二月、木翁尙白の奥書が附いてゐる。

四、奥羽行脚

元祿二年三月——同年九月

歳が明けて元祿二年となつた。芭蕉は春早々奥州へ下らうと思つて、取る物も手に付かず、



股引の破をつぶつたり、笠の紐を付け換へたり、三里に灸を据ゑるなどと、用意をさく／＼怠らなかつた。併し杉風は芭蕉の病身を案じて、容易に許してくれない。ぐず／＼してゐる中に三月も末となつた。之れより先芭蕉は草庵を人に譲り、杉風の別墅即ち平野町の採茶庵へ移轉した。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

いよく／＼出立の日が來た。二十七日である。睦しき限りは宵から集まつて、船に乗つて送つてくれる。千佳といふ所で船から上る。前途三千里の旅、思へば胸塞がつて涙がこぼれる。

春行や鳥啼き魚の目は泪

人々の餞別品、嵩張る物は打捨て、ただ身すがらにと思つたけれど、紙子、ゆかた、雨具筆硯の類、旅行に必要な物だけは捨てるわけに行かず、疲骨肩にかかつて難儀であつたが携へた。餞別の詩歌は嵩ばるものでもないから頭陀の内に入れて持つて行く事にした。素堂の松島の詩、原安適の和歌、杉風や濁子の發句等々。

同行者は曾良であつた。曾良は信州上諏訪の人で、諏訪家に仕へ、久保島氏、久左衛門と稱

した。一時甲州に居て劍道を教へてゐたと云はれた。後浪人して江戸に出で、深川に住み、芭蕉庵へ來て炊事の手傳ひなどして居つた。貞享三年頃入門か。神道を吉川惟足に學び、氣魄不撓の人であつた。寶永七年歿。六十二。壹岐の勝本で歿した。

其日ようやく早加へ着いた。之れより日光街道を目ざし、先づ室の八島に參詣。三十日、日光の麓今市町上町西側の五左衛門といふ人の許へ泊つた。四月一日、日光山詣拜。あらたうとの句があるうらみの瀧見物。

しばらくは瀧に籠るや夏の初

初案、「裏見せて涼しき瀧の心かな」、再案、「ほととぎすうらみの瀧の裏表」、治定此句であつたといふ。

那須の黒羽の知人を尋ねて、野飼馬を借りて、野中に行く。その知人は黒羽の館代淨法寺圖書といふ人で、領主大關伊豫守の老臣である。思ひがけぬ主人の喜に日夜歡待され、弟の翠桃や親族の方にも招かれ、附近の名所なる犬追物の跡、玉藻ノ前の古墳、八幡宮、殺生石などを見る。



秣負ふ人を枝折の夏野哉

殺生石見物の時は館代から馬で送られた。此口附けの男に短冊を所望されて、

野を横に馬牽きむけよほととぎす

石の香や夏草赤く露暑し

修驗光明寺に招かれ、行者堂を拜觀。

夏山に足駄を拜む首途哉

光明寺は大關伊豫守の臣、津田光明寺といふ武家修驗である。

當國雲岸（巖正し）寺の奥に、佛頂和尚山居の跡があつた。その跡を見ようとして、後の山に登ると、石上の小庵を岩窟に結んでゐた。

木喙も庵は破らず夏木立

殺生石に見に行つた時、雨が降つて來たから、高久村の角左衛門といふ人に宿つた。三日逗留したといふ。此家に芭蕉眞蹟の行脚掟、其外畫讃等埋藏されたと。

落ち來るや高久の宿の子規

蘆野の里に西行の清水流るゝの柳を見る。

田一枚植ゑて立ち去る柳かな

白川の關にかかつて、兼盛や能因の故事を思ひ浮べる。

卯の花をかざしに關の晴着かな

阿武隈川を渡り、かげ沼を過ぎ、須賀川の驛に相樂等窮を尋ね、四五日留められる。四月二十二日である。

風流のはじめや奥の田植歌

芭蕉

覆盆子を折つて我備草

等躬

水せきて晝寢の石や直すらん

曾良

まだ他に三吟二卷ある。此頃黒羽の淨法寺圖書（桃雪）よく句送り來る。芭蕉、等窮、曾良で次句する。等躬等は相樂氏、伊左衛門、須賀川の驛長乍單齋きたんと號し、石田未得門、寶永二年四月二十八、

須賀川の宿の傍に大きな栗の木があつた。その木影に可伸といふ隱者が住んで居つた。



世の人の見付けぬ花や軒の栗  
まれに螢のとまる露草

芭蕉  
栗齋

初案は「かくれ家や目だたぬ花を軒の栗」栗齋は可伸の號。

淺香山、黒塚の岩屋を見物して福島に泊る。しのぶもち摺の石を尋ね、忍の里に行く。

早苗取る手もとや昔忍ぶ摺

月の輪の渡しを越え、瀬の上といふ宿へ出る。飯塚の里鯖野を尋ね、丸山といふ所に來た。こゝに佐藤庄司の舊館があつた。

笈も太刀も五月にかざれ紙轍

五月朔日、飯塚に泊る。きたない貧家であつた。灯も無いから爐の側に寝る。夜雷鳴、臥せる上から雨漏り、蚤蚊に食はれて眠れない。持病さへ起つて死にさうだ。翌朝馬を借りて桑折の驛に出る。元氣を出して伊達の大木戸を越す。笠摺、白石の城を過ぎ、笠島の郡に入つて、藤中將實方の墓を尋ねようとしたが、五月雨に道あしく、體も勞れたからやめた。

笠島はいづこ五月のぬかり道

岩沼に泊る。武隈の松を見物。

櫻より松は二木を三月越し

五日、仙臺入り。國分町大島庄左衛門に泊る。四五日逗留。こゝで法蓮寺門外嘉右衛門といふ畫家と知合ひになり、その案内で宮城縣、玉田横野、つゝじが岡、藥師堂、天神社など見物し日を暮らす。嘉右衛門から松島、鹽釜の繪を貰ひ、且つ紺の染緒の草鞋を贈られる。

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

八日、鹽釜へ行く。奥の細道の山際に十符の菅がある。壺碑いしづみを見る。野田玉川、沖の石、末松山を尋ね、夕方鹽釜に入る。その夜めくら法師の奥淨瑠璃を聴く。早朝鹽釜明神參詣。晝頃舟に乗つて松島に渡る。九日其間二里余、雄島の海岸に著く。雪居禪寺別室の跡、坐禪石などを尋ね、松の木蔭に世を厭ふ人に感じ、宿を求め、海から出る月に雅情を恣にする。句出來ず十一月、瑞巖寺參詣。

十二日、平泉と志し、道ふみたがへて、石の巻といふ港に出る。宿を借りようとしても借し手もなく、ようやく貧しい小家に一夜を明かし、明くれば又知らぬ道を迷ひ歩く。袖のわたり



尾ぶちの牧、まゝの萱原などいふ名所をよそに見て、戸伊摩といふ村に一宿し平泉に至る。高館に上り、北上川を眺め、衣川、和泉が城の昔を追懐し、杜甫の詩を思ひ浮べて、時移る迄涙を落とす。

夏草や兵どもが夢の跡

經堂、光堂を見る。

五月雨の降り残してや光堂

南部道遙に見やりの、岩手の里に泊る。小黑崎、みつの小島を過ぎ、鳴子の温泉から尿前の關にかゝり、出羽の國へ行かうとして關守に怪しめられる。大山に登りて日が暮れたので、封入の家に泊る。三日風雨に惱まされ、山中に逗留する。

蚤虱馬の尿する枕もと

主人から究竟な案内者を頼んで貰つて、危い思をして最上の庄に出る。尾花澤に清風といふ紅花商人を訪れ歡待される。

涼しさを我宿にしてねまるなり

芭蕉

常に蚊遣に草の葉を焚く

清風

○  
這ひ出でよ飼屋が下のひきの聲  
眉掃を俤にして紅粉の花

清風は鈴木氏、八右衛門と云ひ、江戸上方へ紅を賣る商人である。金持で、初め京に出て談林を學び、貞享二年頃江戸小石川の寓居で芭蕉に入門した。芭蕉も、「富める者なれど、志卑しからず。」と賞めてゐる。山寺に參詣、閑さや岩にしみ入るの吟があつた。

芭蕉は松島で獨吟歌仙を作つたが、大石田といふ町で日和を待つてゐる時、その末を續いで野天、村老に與へた。それを乍單齋等躬が大石田の何某から貰つて秘藏してゐるが、須賀川の晋流之を傳へ、晋流歿後門人雲南之を出版したといふのである。曾良の筆だと云。後年幽嘯なる者蕉翁獨吟五歌仙考といふ書を作り、芭蕉の獨吟に非ずして、等躬の獨吟である事を看破した。近年芭蕉の作であるといふ人もあるが、極めて疑はしい感がある。

芭蕉は最上川を渡らうとして、大石田町の一榮亭に於て日和を待ち、此地方の人々に指導的



にわりなき一卷を残した。一榮といふのは高野平左衛門で、それは五月末日の興行であつた。

五月雨をあつめて早し最上川

芭蕉

螢をつなぐ岸の舟杭

一榮

會長、川水の四吟である。その眞跡は現今大石田町の佐藤茂兵衛氏の手歸してゐる。大石田で日和を待つてゐる時、川向ふの新庄といふ城下で、所々俳句興行があつたと傳へられた。

新庄盛信亭にて

風の香も南に近し最上河

芭蕉

小家の軒を洗ふ夕立

柳風

同じく風流亭にて

水の奥氷室たづぬる柳かな

芭蕉

ひるかほかゝる橋の伏笠

風流

六月三日、羽黒山に登る。案内者は國司の左吉で、別當代會覺阿闍梨に謁し、憐愍の情濃やかにもてなされる。四日、本坊に於て俳諧興行。

有がたや雪をかをらす南谷

芭蕉

住むほど人の結ぶ夏草

露丸

露丸(呂露)は左吉である。七吟歌仙である。會覺師も俳句をやつたと見える。五日、羽黒權現參詣八日、月山に登山。阿闍梨の需に依て三山順禮の句を短冊に記す。其他天宥法師追悼、文も書く。

涼しさやほの三日月の羽黒山

雲の峰いくつ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

羽黒を出て鶴岡の城下長山重行といふ武士の家に至る。重行は酒井侯の臣で、左吉も共に送つて來た。六月十日、重行亭興行。

珍しや山を出羽の初茄子

芭蕉

蟬に車の音そへる井戸

重行

四吟歌仙である。



川舟に乗つて酒田の湊に下る。淵庵不玉（伊藤玄順）といふ庄内城主酒井左衛門尉に仕へる醫師の許に泊る事になつた。

あつみ山や吹浦かけて夕涼み  
海松刈る磯にたむ帆筵

芭蕉  
不玉

因に完來の秋の夜といふ書に、不玉の獨吟歌仙を芭蕉の判詞を加へたものが出てゐる。延享四年樂水軒の序が附いてゐて、此巻は昔火事に逢つて焼けたものであるが、二木何某の藏本を借りて寫したとあるが疑はしい點がある。奥書に、元祿六年春中、芭蕉庵桃青と署名し、「近年武府の風雅分々散々、邪路の輩も相見え候處、云々」とあつて、如何にも門戸を構へたやうな傲岸な態度が芭蕉らしもくないが、大方信じられてゐるからこゝに云つて置く。

六月十五日、酒田寺島彦助亭俳諧興行。

涼しさや海に入れたる最上川  
月をゆりなす浪の浮海松

芭蕉  
令直

令直は寺島寺助の俳號。初案、暑き日を云々か。

之より舟を象潟へ浮べ、その絶景に魂をなやます。松島は笑ふが如く、象潟は怨めるが如しと云つてゐる。

象潟や雨に西施が合歡の花  
汐越しや鶴脛ぬれて海涼し  
小鯛さす柳涼しや海さが妻  
夕晴や櫻に涼む波の花

出羽と越後の境鼠の關を越え、越後路に入り、越中一ぶりの關に至る迄九日間、暑濕の勞に病起る。越後直江津にて、七月六日、左栗亭興行。會良、眠鷗等八吟歌仙。

文月や六日も常の夜には似ず  
露をのせたる桐の一葉

芭蕉  
左栗

文月の句は同所聽信寺にての吟と云。眠鷗は右の寺の住持。又同所にて石雪、更也等との四吟歌仙がある。

出雲崎より海上十八里の佐渡を見渡し、



荒海や佐渡によこたふ天の川

高田町醫師細川春庵（棟雪）亭にて、

薬園にいづれの花を草枕

萩のすだれをあげかける月

芭蕉  
棟雪

親知らず、子知らず、犬もどり、駒がへしなどいふ北國の難所を越え、旅宿にて新潟の遊女と泊り合はせる。

一家に遊女も寝たり萩と月

黒部、四十八ヶ瀬など多くの川を過ぎ、那古の浦に出る。

早稲の香や分入る石は有磯海

越中の吟であらう。加賀に入り、熊坂といふ所で、

熊坂がゆかりやいつの玉祭

卯の花山、くりからか谷を越え、七月十五日金澤に着く。一笑（小杉氏）の追善句。

塚も動け我泣く聲は秋の風

少幻庵にて

秋涼し手毎にむげや瓜茄子

初案「残暑しばし手毎に料れ瓜茄子」か。

金澤から小松へ行く途中吟、

あか／＼と日はつれなくも秋の風

金澤の生駒萬子（前田侯の馬廻役、八百石を領す）が馬で芭蕉を追つかけて、餞別として白金二兩と白衣とを贈った所、芭蕉は自分のやうな乞食坊主には分の過ぎた贈物であるし、途中盗賊の恐もあるからと云つて固辭して受けなかつたといふ逸話は此時であつた。

小松といふ所にて

しほらしき名や小松吹く萩芒

露を見知つて顔うつす月

芭蕉  
鼓蟾

鼓蟾亭に於ける歌仙興行。十吟である。

柳陰軒にて（句空）



散柳あるじも我も鐘を聞く

觀生亭雨中會

ぬれて行く人もをかしや雨の萩

芒がくれに芒吹く家

芭蕉、享子、會良、北枝等十一吟。

太田、神社參拜。實盛の甲、錦の切れを見る。

むざんやな甲の下のきりくす

力も枯れし霜の秋草

初案、あなむざんやなとする。

山中温泉に入浴。宿の子供はまだ六七歳位の子供で久米之助と云。父は貞徳老人の門人であつた。桃妖といふ號を附ける。

桃の木其葉散らすな秋の風

芭蕉に山中温泉の頰がある。

芭蕉

享子

享子

山中や菊は手折らぬ湯の匂ひ

北枝が芭蕉から俳諧を教示されたのは山中温泉滞留中であつた。山中問答と云。後年也同の出版にかゝる。山中温泉で北枝、會良、芭蕉の三吟歌仙があつた。俗に燕歌仙と云つて有名である。

馬借りて燕追ひ行く別哉

北枝

花野みだるゝ山のまがりめ

會良

月よしと相撲に袴ふみぬきて

芭蕉

山中の里を出る名残

湯の名残今宵は肌の寒からん

會良腹を痛め、伊勢の長島といふ所へ一足先立つ。會良の留別吟、芭蕉送別吟がある。

今日よりや書付消さん笠の露

行きくゞて倒れ伏すとも萩の原

會良

大聖寺の城外金昌寺に泊る。別れる時寺僧に一句を與へる。



庭掃いて出づるや寺に散る柳  
汐越しの松を尋ね、丸岡の天龍寺を訪れる。北枝と松岡の茶店で別れる時、扇に句を書いてやる。

物書いて扇引さく名残かな  
芭蕉

笑うて出づる朝霧の中  
北枝

初案、物書いて扇へぎ分る名残哉とある。菅菰抄附録に、「此時北枝は越前細呂木驛と金澤町との間、姫落しといふ所の茶店迄翁を送り來ると言ひ使ふ。」とある。その扇は京骨にて萩の繪であつたと。

北枝は立花氏、次郎右衛門、加賀小松の人、金澤に住み、研屋源四郎と云。牧童の弟、はじめ宗因門、酒が好きで逸話が多い。北方の逸士である。

永平寺參詣。福井の隠士等裁を訪れ二泊する。八月十四日夕敦賀に入る。氣比、明神夜參。

月清し遊行の持てる砂の上

十四日の夜は月がよかつたので、翌も大丈夫だらうと云ふと、宿の主人が越路の習、晴雨計

りがたしといふ。果して名月雨。

名月や北國日和定めなき

十六日、種いづの濱に舟を走らせる。酒や辨當を用意し、海上七里で着く。夕暮の寂しさ須磨以上であつた。佗しい法華寺に酒を温め、その寂しい景氣を味つた。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

波の間や小貝にまじる萩の塵

小萩散れますほの小貝小盃

鐘が崎にて沈鐘の由來を語られ、

月いづこ鐘は沈めて海の底

路通敦賀まで出向ふ。馬に乗つて美濃大垣に入り、如行が家に至る。會長は伊勢より、越人も馬でかけ付ける。前川、荊口父子、其他親しき人日夜訪れて、且つ喜び、且ついたはる。九月三日であつた。其夜不知、荊口、如行、左柳等と八吟歌仙興行。

野あらしに鳩吹立つる行脚哉

不知



山に別るゝ日を萩の露  
初月や先づ西窓をはづすらん

二四〇  
荊口  
芭蕉

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉

芭蕉

種は淋しき茄子一もと

如行

○  
からびた吟聲で、如行の下の句を吟じたと云。斜嶺亭の風光を賞し、

そのまゝに月も頼まじ伊吹山

恕水の別墅で、

こやもり居て木の實草の實拾はば

左柳亭興行、路通、文鳥、恕行、越人、荊口、木因等十二吟。

早く咲け九日も近し宿の菊

芭蕉

心うき立つ宵月の露

左柳

六日、伊勢の遷宮を拜まうと、木因の船に乗つて揖斐川を下る。

蛤の二見に別れ行秋ぞ

芭蕉は大垣へ着いて、最上の人から貰つた紙の衾を、如行の門人竹戸に與へる。紙衾の記がある。如行の返答、竹戸の題句、路通、越人、會良の文もあつた。

以上の旅行記を奥の細道と云。芭蕉四十六歳の作、元祿二年二月二十七日江戸を出立してから、同年九月三日まで、草枕七ヶ月の大旅行であつた。

題號に於ては普通宮城野から松島へ行く途中の地名を取つたものだと云はれてゐるが、作者の寓意は未だ外にあつた事だらうと思ふ。奥羽行脚は芭蕉に取つては命がけの旅行で、既に出發する時から、「若し生きて歸らばと、定めなき頼の末をかけ、云々」と言つてゐる位、死を覺悟しての旅行であつた。果して行つて見ると、種々な場所で、いろ／＼な危い目に逢つてゐる。例へば尿前の關を越え守る時關守に怪しまれてやうやく通り抜けたり、出羽へ入る時大山の險を越えて、案内者から、「此道必ず不用の事あり。恙なう送りまゐらせて仕合せしたり云々」と云はれ、胸を撫下して通つた事さへあつた。奥羽行脚は芭蕉には深山、幽谷を辿つて歩いた記念的な旅行であつたから、何か思出となるべき題名が欲しかつたのだらうと考へる。心細い



果敢なげなと云つたやうな氣持の出てるものでありたかつたのだらう。そこでたま／＼鹽竈街道に奥の細道といふ地名があつたので、それを敢へて書名としたのぢやなからうかと思ふのである。

芭蕉の句風は細道行脚以來又一變した。去來抄に、

魯町曰、先師も基より出でざる風侍るにや。去來曰、奥州行脚の前はまゝあり。此行脚のために工夫し給ふと見えたり。行脚の中にも、あなむざんやな甲の下のきり／＼すといふ句あり。後にあなの二字を捨てられたり是のみにあらず、異體の句なども省き捨て給ふもの多し。

とある。其他松岡の茶店で北坂と別れる時の扇の句に、扇へぎ別る名殘かなと云ふ句もあつたが、それも後で扇引さく名殘と改めた例は多かつたものであらう。行脚の苦勞が芭蕉の心情に非常なシヨックを與へ、表現も洗鍊され、藝術化されて、一層正風の光を放つやうにしたのである。此意味に於て此行脚は芭蕉の俳風に一段と革新的方面を導いたものと見えるのである。

文章論であるが、本集の名文である事は古來衆口の一致する所であつた。許六、白雄、梅室

等部分的にも全體としても賞めてゐるが、要するは素龍の跋の、

からびたるも艶なるも、逞ましきもはかなげなるも、奥の細道見もて行くに、おぼえず起ちて手たゞき、伏してむら肝を刻む。云々

とある評で盡きてゐるかと思ふ。奥の細道は何回かの推敲の後に成つたものらしく、句を丹念に訂正する所を見ると、文辭も念を入れて改めた所もあつたのであらう。土芳の黒冊子に、成歳の旅行道の記少し書けるよし物語あり。是を乞ひて見むとすれば、師の曰、さのみ見る所なし。死して後見侍らば、是とてもまたあはれにて、見る所もあるべしとなり。感心なる詞也。見ざれどもあはれ深し。云々

とあるが、此道の記は恐らく奥の細道の事ではあるまいかと思ふ。見せないと云ふのは、單にあはれ深しといふ意味だけはあるまい。死んだ後で見れば、古人の筆蹟であるからあはれ深しにはなるが、その門人に見せなかつた所は、相當骨折つて推敲したものであるし、自分の命も長い事はあるまいといふ考から、今こゝで無闇に見せるよりも、見せないで残して置く方が門人のためにもなり、興味を深くするだらうといふ下心があつたからかも知れない。又一つには



奥の細道は完成する迄には相應時日を要してゐる。素龍に清書させたものが、元祿七年の初夏に成つてゐるのだから、六年もかかつてゐるわけである。五六年の日子を費して成つた本を、むざ／＼と門人に見せるのも、あまり粗末な取扱ひであらうといふ、慎重な氣持も手傳つてゐたのかも知れない。とにかく本書は芭蕉の生前見た者はないので、去來さへ懇望してようやく死ぬ前に約束してくれたといふ次第で、それだけ本書が芭蕉に取つて大切な生の記念であつたのである。支考は「多くは萬葉の假名勝ちに、今はた我だに讀み易すからず。」(古今抄)と、讀んだやうな事を云つてゐるが、信じられない言である。

明治の人の論に、文體は平易簡潔であるといふのはよいが、之を野ざらしの文に比して、及ばざる事遠しといふのは僻論である。野ざらし時代と細道時代とは芭蕉の生活が違つてゐる。野ざらしは雄渾、跌宕と云はうか、一體に強く出る書方で、若々しい感情である。細道は風雅の寂を盡した時代で、氣持は老成し、ほどけてゐる。従つて行文も強ひて技巧せずとも變化がある。丁度冬の日と猿蓑の相違の如く、行脚の寂が圓滑に行渡つて、一句一句にしみじみした氣持が見える。野ざらしは野ざらしでよく、細道は細道として、進んだ藝術の徑路を見なければ

いけない。或人は西鶴の文章よりも缺點が多いと云ふが謬見である。西鶴などと比較する事が第一間違つてゐるし、もつと慎重な謹嚴な氣持で書いてゐる所を味はつてほしい。文法上の誤は俳人の文章には殊に多からうが、語法に反いてゐるからと云つて名文でないとも考へられない。

奥の細道の成年は元祿七年と見るべきである。それは素龍に清書させたものは元祿七年の初夏に出來上つてゐるからである。年月頭陀の間に入れて、行く先々に携へたといふのは稿本の事であらうが、元祿七年五月郷里へ歸る時は、自筆本と共に素龍清書本も携へたものであらうか。素龍清書本は伊賀の元の許へ残して置いたといふのだから、素龍本の頭陀に入つてゐた事は事實で、それでなければ去來が芭蕉の兄から素龍の清書本を受取る筈はないのである。眞蹟本の行方は其後不明であるが、刊本は普通元祿十五年が最初のやうに傳へられてゐる。支考の説によると、滅後六年の秋に至り、四半なる本紙のまゝに、一冊を書寫し、去來を奉行として出版させたとある。滅後六年といふと元祿十三年になつて、同年刊行といふわけであるがどうだらうか。四半なる本紙といふと、素龍清書本の形を云ふやうだが、刊行された素龍本は紙



形本であるから形を違へたものか詳かでない。

とにかく原本には眞蹟本、素龍清書本、去來書寫本、其角筆寫本などがあつた。素龍本以下は皆刊本である。井筒屋の奥書によると、眞蹟本は門人野坡の許にありとあるが、その傳來は不明である。北華が須賀川の晋流を訪れて、主人から眞蹟の奥の細道を見せて貰つたとあるが之が野坡の手に渡つた眞蹟であるかどうか不明である。但し野坡の八鳥放生日(享保十一年刊)の見返しに、おくのほそ道とあつて、芭蕉翁眞蹟、墨附三十二葉と註してゐるから、その時迄は野坡の手本にあつた事は分かる。又江戸の櫻壽軒といふ人が奥の細道の眞蹟本を拓本として出版してゐるが、之は刊行年代も分らないし、野坡の傳本とどういふ關係にあるかそれも分らない。

素龍清書本、井筒屋の奥書によると、書の縦五寸五分、横四寸七分、紙の數五十三枚、首尾に白紙を加へる。外に素龍の跋がある。行成表紙、紫の糸でとぢ、外題は金の眞砂を散らした白地に、おくのほそ道と自筆で書いて隨身した、遷化の後門人去來の許にふる、今去來が本を以て模寫する云々とある。敦賀史跡調査委員山本計一氏の説によると、去來は伊賀の芭蕉の兄

に懇願して譲り受けたが、去來歿後、長崎の人で京に出て醫者をしてゐる久米升頭に傳はり、升頭は娘を若狭小濱の吹田几遊にやる時、引出物として素龍本を持たせてやつたが、几遊夭折後重縁の間柄である敦賀の白崎琴路へ譲つたのが寶曆九年の秋で、その後の傳來は詳かでないが、福井縣愛發村の西村繁といふ人の曾祖父は群鷄舎野鶴と云つて有名な俳人であるから、琴路から野鶴に傳はり、野鶴から西村氏の手に入つたのであらうと云つてゐる。

去來書寫本、蝶夢が明和六年冬伊賀の上野へ旅行して得た本である。明和七年刊。素龍の跋(元祿七年初夏)、去來傳書の跋(元祿八年九月十二日)、蝶夢發見の次第が添へてある。去來の跋によると、書の外形は井筒屋本の奥書の通りで、元祿七年六月芭蕉が去來の落柿舎へ來た時書寫を乞うたけれど許がなかつた。芭蕉が死ぬ前に去來にその書寫を許したので芭蕉歿後兄の半左右衛門へ交通して、素龍の清書した原本を送つて貰つた。それを自分で書寫しその代りに芭蕉の兄の所へ送りかへした。といふのである。去來が書寫した奥の細道であるから、去來本といふのである。

其角筆寫本、大本である。奥に元祿十年冬其角寫於大阪旅店灯下校合畢とある。明治十八年



## 芭蕉の精神

二月其角堂の藏版であるが、永機が落丁一枚あるものを補筆だけで他は其角の眞蹟の摹刻であると云はれてゐる。

奥の細道の異本、別本には關更のおくの細道(天保十四年刊)、三津人の百家交筆 おくの細道(文化十二年刊)、交山、香雪の畫いた繪本奥の細道(文政五年刊)等がある。關更本は蛤の二見に行くの句が卷頭に出てゐる。三津人本は當時の名流百俳士に細道の文一節づつを書かせ、それに巢兆や松年などの繪を入れたもの、俳人の筆蹟を知るによろしく、繪本奥繪で解いたもので子供や女の讀物である。

註書には梨一の菅菰抄(安永七年刊)、同附録(寫本)、鶯宿の贅頭奥の細道(安政五年刊)、護物の稿本おくのほそ道引證、錦江の奥の細道通解(文政五年成)等があるが錦江の通解が最もよろしい。明治以後木村架空の新釋奥の細道(明治二十九年刊)、三宅邦吉氏の新釋奥の細道(明治四十四年刊)、黒澤教一氏の奥の細道註解(大正九年刊)、小林一郎氏の奥の細道評釋(大正十年刊)、井泉水氏の「贅註、大藪氏の新研究があるが、贅註は實地踏査の新みがあり、新研究は初學者に親切で良書である。

奥羽行脚の影響は後世に至るほど甚しかった。行脚に出なければ俳人の資格がなく、幅が利かないと云つた風であつた。途中で行脚が行き逢ふやうな喜劇もあつた。終には俳諧師と博奕打には宿を借さないといふやうになつた。芭蕉の生前細道の一步を踏んだものに路通と支考とがある。路通は元祿三年十一月俳諧勸進に向ひ、同四年六月月山に登り、會覺阿闍梨その他の句合十八番の判をした。月山發句合と云つて勸進牒(元祿四年刊)に出てゐる。

支考の奥羽行は元祿五年五月であつた。芭蕉はその東行を餞して、

此心推せよ花に五器一具  
と云つてゐる。

芭蕉歿後は天野桃隣の陸奥千鳥がある。元祿九年三月十七日の出立である。元文元年六月二十日立國の奥羽探勝があつた。旅記を月見ヶ崎と云。北華も元文三年三月二十二日松島に旅立つてゐる。蝶の遊といふ旅記がある。方鏡千梅の松島行、元文三年四月十二日。旅記を若葉の奥と云。蕪村の松島行は寛保三年頃であつた。松島の天麟院の和尚から名取川の埋木で作つた硯箱を貰ひ、重くてたまらず、途中白石の宿屋の椽の下へ放り込んで来たといふ逸話がある。

## 旅上人詩



雪中庵蓼太の松島行も有名であつた。寛保三年であらう。仙臺に嘉定庵を結び、奥の細道拾遺の編がある。宋屋の松島見物は延享二年九月十六日で、六十二歳の老齡であつた。杖の土といふ旅行吟稿があつた。秀國の松島行は明和元年七月一日、青森外の濱迄行つた所は異彩である。奥羽行記がある。尾張の曉臺は明和七年三月十八日、高館懷古で筆を斷つてゐる。句稿をしをり萩と云。白雄の奥羽旅行もあつた。奥羽紀行を著し、出雲崎で佐渡を見渡す所までで終つてゐる。大阪の飛脚問屋大伴大江丸の松島見物も明和八年頃であつた。筆硯の調度清らをつくし、折ふし差出た春の月に一句も浮ばず、やうやく蓼太の朝霧やあとより戀の千松島といふ句に感心して、絶妙な境を探り得たといふ馬鹿らしい逸話がある。明和八年諸九尼は五十八歳で、只言法師を連れて石山を立ち、松島に赴いてゐる。六月四日、棚倉で浪人と宿の下女との密會に出會つた杖滑稽談があり、五ヶ月かかつて無事に旅行を終つた。秋風の記といふ旅記がある。栗本玉屑の東行遊覽は大旅行であつた。寛政六年三月六日播州加古を立ち、大江の岸から舟に乗つて淡路の舊庵に入る迄、東貝といふ旅記に詳しい。書中珍聞奇談が多い。一茶の奥羽行脚も大規模であつた。享保元年以前からあつて、文政二年一度中止して、文政八年四月十六

日出立する事になつた。六十三歳である。松島に至り、松島やあゝ松島や松島やの句を見て、松島や右之通に御座候也と記し、足跡は外ヶ濱迄伸びてゐる。明治に入つても素兄のおくの雪道（明治十五年刊）があり、大正、昭和に至るも探賞に研究に此行は盡きないのである。

## 五、細道以後の行脚

### 一、伊勢、伊賀、大和、京、近江行

奥の細道を終つた芭蕉は、伊勢の遷宮を拜まうと、内宮へ来て見ると、既に事定まつたので十三日（九月）外宮の遷宮を拜観する事にした。九月十五日、木因宛の手紙に詳しい。

尊さに皆押合ひぬ御遷宮

伊勢の中村といふ所で、

旅上詩人

秋風や伊勢の墓原なほすごし



又女の宅に止まり、その妻の健氣なる心に感じ、明智光秀の妻を思出し、

月さびよ明智が妻のはなしせん

伊賀の配力亭にて(杉野氏)、

人々をしぐれよ宿は寒くとも

竹人の全傳に、「己の三月末(元祿二年)より、松島に旅立つ。直に九月上旬伊勢の遷宮。萬菊、路通、卓袋に逢ひ、久居二三日のやどり後、李下を伴れて伊賀に歸り、霜月迄逗留(李下は一宿、路通は暫くあり)、曾良も來り、東に別る日、奈良の隣のしぐれかなといふ句あり。霜月末(路通同行)奈良御祭禮拜見。夫より大津に出られる。云々」とある。此時水鶏笛を頭陀袋より取出し、配力に附與。近江の遊刀餞別の具であつた。伊賀にかへる途中で、

初時雨猿も小蓑をほしげなり

猿蓑卷頭の名句で、其角の序に、「我翁行脚のころ、伊賀越えしける山中にて、猿に小蓑を着せて、俳諧の神を入れたまひければ、云々」とある。伊賀越えといふと、伊賀の長尾峠を越えて奈良に赴くといふ説と、伊勢から伊賀に入り、山城の方面へ行く伊賀街道の山越しといふ説と

あるが、奈良へ赴いたのは霜月末であつたから、初時雨の句意と合はない。こゝは伊勢から伊賀へ入る時の山越しであらうと思ふ。さうすれば九月だから初時雨の時期とは先づ一致しよう。伊賀半殘(山岸氏、芭蕉の姉婿)興行。一入といふ者の會で、

冬庭や月をいとなる蟲の吟

平沖といふ者の宅で、

屏風には山を畫いて冬ごもり

此句後に金屏の松のふるさよと改めた。

山中に子供と遊びて、

雪の日に兎の皮の髭つくれ

十一月朔日、上野良品(友田氏、覺左衛門、藤堂氏の士)亭にて、芭蕉・良品・梢風・土芳・半殘等六吟歌仙。

いざ子供走りありかん玉霞

折敷に寒き椿水仙

芭蕉  
良品



十一月末、奈良の大佛の榮興を喜び、

初雪 やいづ 大佛の柱立

雪 悲しいつ 大佛の瓦ふき

十二月、京に上り、去來か嵯峨の落柿舎に遊び、鉢叩を聴く(二十四日)。去來に鉢叩の辭がある。

長嘯の墓もめぐるか鉢たゞき

膳所に赴き越年。

何にこの師走の市に行く鳥

正月十七日、萬菊丸宛の手紙に、

拙者も霜月末には南都祭禮見物して、膳所へ出で、越年。歳旦、京近き心、「菰を着て誰人ゐます花の春」。山中の子供と遊ぶ、「はつ雪に兔の皮の髭つくれ」。南都、「雪悲しいつ大佛の瓦ふき」。京にて鉢叩を聞きて、「長嘯の墓も廻るか鉢たゞき」。歳暮、「何にこの師走の市に行く鳥」。急便早々に候。正二月の間伊賀へ御越し待存候。宗七(猿雖)も御噂申斗に候。

とある。

元祿三年(四十七歳)の春を迎へる。都近き所とは乙州亭オトシマであらう。大津にての歳旦吟。

薦を着て誰人ゐます花の春

竹人の全傳に、「同じく三年、正月はじめより二月迄伊賀に在。云々」とある。

大津から伊賀へかへる。二月六日、上野百歳亭(西島氏、藤堂家の土)にて、芭蕉・乍木・

百歳等八吟歌仙。

黄鳥オウジョウの笠落したる椿かな

芭蕉

古井の蛙草に入る聲

乍木

其頃伊勢に至り、園女そのめに句を送る。

のうれんの奥物ゆかし北の梅

菊の塵に、

わが此道に入りし初めは元祿二年の冬なり。あけの年の如月、かの翁、この人、曾良などひきか来られいに、しかくと告げければ、翁よろこびて、いかならむ事をもつゞりて



よと仰せいたるに、花まではしぐれて残れ檜笠と云ひ出でければ、やがて脇の句附けてたうべて更に、

と前書がある。園女は伊勢松坂の人、本姓度會氏、山田の醫師斯波一有（渭川）の妻、大阪に住み、一有歿後江戸に下り智鏡と改め、安藤冠里公の母に仕へる。變つた女で、髪の毛を頭の上に二十本ほど残したり、大きい籠をかぶつて男に見えたり、或は袖の下を切つて下駄の緒にし、文庫の蓋を流しに用ひたりといふ。芭蕉の卑んだ前句附の點者をして盛名があつた。享保十一年歿。六十三。元祿二年入門。

三月十一日、伊賀荒木村白髮の社で、

鳥打つ音や嵐のさくら麻

風麥亭にて

木のもとに汁も膾もさくら哉

あす來る人はくやしがる春

芭蕉

風麥

伊賀、國花垣の庄は、そのかみ奈良の八重櫻の料に寄せられたものであると傳へられ、

一里はみな花守の子孫かや

喬木子（藤堂修理、藤堂家の土）の許にて歌仙一折。

土手の松花や木深き殿作り

水固亭（松本氏、後非群と云。伊賀上野の人）にて歌仙一折。

きりぐす忘れ音に啼く火燧哉

四月、大津の珍碩亭に至り、洒落堂の記を作る。

四方より花吹き入れて鳩の海

珍碩、曲水と木の下に汁もの句を立句として三吟歌仙興行。ひさごに出る。

木の下に汁も膾も櫻かな

芭蕉

西日のどかによき天氣なり

珍碩

珍碩は濱田氏、醫師、後酒堂といふ。元祿六年大阪に移る。元文二年歿。

石山の奥、岩間山の後、國分山の幻住庵を修理して住む。曲水の伯父幻住老人の隠宅で、曲水の周旋であつた。幻住庵、記がある。八月、木曾塚の無名庵入り、義仲寺の境内木曾義仲の



芭蕉の精神

墓の側にある草庵、正秀の世話らしい。名月は尙白との兩吟、次で之道・珍碩來り三吟、李由去來、柿や菟蕪を持つて來る。路通の境遇に同情し、十二月の末京を出て、大津の乙州の新宅に春を待ち、人に家を買はせての句があつた。今歳は手が震へ、足が痛み、とかく病勝ちであつた。

元祿四年（四十八歳）湖頭の無名庵に春を迎へ、大津繪の句があつた。正月、大津から伊賀へかへり、卓袋（上野の人、貝増市兵衛、商號箔屋與兵衛）の月待（二十六夜）に、

月待や梅かたげ行く小山伏

西島百歳亭で歌仙興行、

こまかなる雨や二葉の茄子種

赤坂の庵（兄半左衛門の庵）で、

不精さやかき起されし春の雨

三月二十三日、萬平（上野の人、大阪屋次郎太夫）の別墅で歌仙一折。

年々や櫻を肥す花の塵

竹人の全傳に、「薪の比南良に行き、伊賀にかへり、三月末又大津に在、冬までこゝかしこ歴覽云々」とある。薪とは南都興福寺の薪能で、二月七日から十四日迄行ふ。奈良行の句見當らな

い。

三月末、粟津の無名庵入り、

行春を近江の人と惜しみける

去來が芭蕉から、「汝は風雅を語るべきものなり。」（去來抄）と賞められたといふ名句である。

四月、尙白と浪花に下る。

ただ一夜桃に宿かる木幡かな

相國寺

鶯に感ある竹の林かな

上醍醐

留守といふ小僧なぶらん山櫻



花の山二十のぼれば大悲閣

十八日、嵯峨の落柿舎に遊ぶ。去來の別荘である。五月四日、落柿舎退出。

六月、粟津の無名庵へ歸る。六月二十日、小春宛の手紙に、「殘生いまだ漂泊止まず。湖水の邊りに夏をいとひ候」云々とある。

京にても京なつかしや時鳥

京・大津・膳所あたりを往來し、その間本間氏（主馬、丹野と號す。大津の人、能の太夫）の亭に招かれ、

ひらくとあぐる扇や雲の峰

蓮の香に目をかよはすや面の鼻

大津の湖仙亭に行き、

此宿は水鶏も知らぬ扇かな

曲翠亭に遊び、

飯あふぐかかが馳走や夕涼

八月、無名庵月見。待宵（十四日）は楚江亭、名月（十五日）は木曾塚、十六夜（十六日）は湖上に泛び、堅田の浮御堂に行く。三夜を月の本末と云ふ。句がある。九月九日、乙州一樽を携へて來る。十一日、其角送別の會を無名庵に開く。

白露をこぼさぬ萩のうねりかな

座右之銘も此頃の作であつた。

物云へば唇寒し秋の風

十月、李由の明照寺に泊る。李由は俗姓月澤氏、伊豫河野氏の後裔と云はれる。近江犬上郡平田村光明遍照寺の住職、亮隅上人と云。字を買年、居を四梅廬と號する。茶道に興味があり許六と親しく、篇突、韻塞の著がある。寶永二年六月寂。四十五。

百年の氣色を庭の落葉哉

美濃大垣斜嶺亭に至り、斜嶺・如行・荆口等九吟十八句成。斜嶺亭は戸をあけると西に伊吹山が見えて、孤山の徳があると芭蕉も賞めた勝地であつた。

もらぬほどけふはしぐれよ草の屋根

斜嶺



火を打つ聲に冬のうぐひす  
一年の仕事は麥におさまりて

如行  
芭蕉

初便によると、此第三は十餘句ほど作り直し、後座がしめつたので、之に決定したと云はれてゐる。此時の江戸下りは桃隣を伴つた。支考も尾張から加はつたものらしい。支考の笈日記に「おなじ冬の行脚なるべし。はじめて此叟に逢へるとて」と前書して、露川入門の句を示してゐるが、一説に寒川入門は元祿元年知足亭の時であるとも云。支考の削かけの返事に、「名古屋は沙汰なしにて通り、云々」とあるが嘘らしい。名古屋へ行つて寒川に逢つたのは此行である。

奥庭もなくて冬木の梢かな  
小春に首の動くみのむし

露川  
芭蕉

露川は澤氏、通稱藤屋市郎右衛門、伊賀の人、名古屋通傳馬町に住み珠數師。芭蕉の偽説を賣歩く事支考と同じく、それがため互に爭論となつた。寛保三年八月歿。八十三。月空居士と云。

十月二十日頃熱田に至り、梅人亭に泊る。三日追留と云はれる。鍛笥物語に、「支考、桃林の二法師ともなひて、梅人子が許におはして」と前書し、芭蕉・梅人・支考等歌仙が出る。此歌

仙には越人も桐葉も別席してゐた。

水仙や白き障子のともうつり

芭蕉

炭の火ばかり冬のもてなし

梅人

三河の新城（とろろ）に至り、白雲を宿とし、その子に桃先、桃後といふ號を與へる。

其句ひ桃より白し水仙花

白雪は太田氏、金十郎、通稱升屋金左衛門と云。享保二十年歿。七十五。此句を立句として芭蕉・白雪・桃隣等十二吟歌仙成。

土屋藁屋の並ぶうず雪

白雪

新城の土菅沼權右衛門の耕月亭にて、

京にあきて此木枯や冬住居

鳳來寺に參詣、途中病氣にかゝり麓の宿に泊る。

夜着一つ祈り出して旅寢哉

木枯に岩吹きとがる杉間かな



駿河島田町の如舟に至る。如舟は塚本氏、通稱孫兵衛。代々俳人で、芭蕉や門人の筆跡を藏したといふ。

宿借りて名を友のらする時雨哉

十一月初め江戸へ歸る。元祿二年三月奥の細道の旅に出立してから三年を費してゐる。無事に歸つて來たので、門人は旦暮に訪ねて、祝辭を述べた。

都出て神も旅寝の日數哉

深川の芭蕉庵は奥羽行脚前に雛を飾る人に譲つて了つたから住家はない。そこで一時橋町に寓居した。或は番町に居たとも云はれた。

二、最後の歸郷

元祿七年(五十一歳)、芭蕉は江戸の芭蕉庵で春を迎へた。路通の行狀記に、

老も半の春を迎へ、雑煮の餅うまく覺え、淺漬も齒にしみわたるなれば、年の名残も近づくにやと、門人正秀がもとへ文の端に書きて送り給ふ。云々

とある。元祿四五年の頃病氣も直つたであらうが、だん／＼衰弱を感じて來て、心細くなつたものと見える。

蓬來に聞かばや伊勢の初便

去來抄に、

去來曰、都又は古郷の便ともあらず、伊勢と侍るは元旦の式の今やうならぬに神代を思出で、たより聞かばやと道祖神の早胸中をさはがし給ふかところ承り侍れと申す。

とある。伊勢の神宮の神々しい元旦の式を想起して又旅情が動いたのであらう。

五月、芭蕉はいよく郷里へ立つ事になつた。子珊の別座敷へ招かれ、子珊・杉風・桃隣・八桑等の送別會があつた。五吟歌仙。

紫陽花や藪を小庭の別座敷

芭蕉

よき雨あひひに作る茶俵

子珊

山店の錢別吟もあつた。

新麥はわざとすゝめぬ首途哉

山店



まだ相蚊帳の空はるかなり  
芭蕉  
其他淨求法師も指を折り文字を數へて餞別吟を送つたり、素龍齋全故も贈芭叟餞別辭の一文があつた。

出立の日は八日であつた。目的は老いたる長兄を心許なく思つての歸郷であつたらうが、實は此度西國に渡り、長崎に逗留して、唐船の往來を眺め、聞き馴れぬ人の言葉を聞かうと思つて出立したのであつた。門人は品川・川崎迄も見送つて別を惜んだ。

麥の穂を力につかむ別かな

元祿六年十月十三日、北枝宛の手紙に、「西國へは何とぞ同行に致度候間其御心得頼入候。云云」とあるから、西國行は北枝を伴ふ考でゐたものと見える。

供には次郎兵衛を連れた。芭蕉庵の留守は壽貞・伊兵衛・桃隣に頼んだが、杉風には特にその取締を依頼した。箱根の關を越えて、

目にかゝる時や殊更五月富士

道のほとりに休らひ、

どむみりとあふちや雨の花曇

五月(六月か)十一日、杉風宛の手紙に、

拙者道中島田あたりまでは、つかへなども折々音づれ候得共、次第に達者に成候て、道道二三里、日により五里ばかりも、養生のため歩行、足場能き所は馬にも乗り、傍致候て、無恙上着致候雨天大方小雨にあひ候て、さのみ暑き程の事は無御座候。云々

とある。十五日、島田町の塚本如舟の家に泊る。笈日記に、「五月雨の雨風しきりにおちて、大井川水出侍りけるにとふめられて、しまだに滞留す。女舟・如竹などいふ人のもとにあそびて」と前書して、

萱はまだ青葉ながらに茄子汁

五月雨の雲吹きおとせ大井川

とある。如竹は杉本氏であらう。前の五月十一日附の杉風宛の手紙に、十五日、島田へ着候て一夜留り候處、其夜大雨風水出候て、三日渡り留り候て、十九日立ち申候。いまだ高水にて、馬のしりがひやうく隠れぬほどの事に候得共、島田の宿は懇



意の者共故、馬川越隨分念入、一手ぎは高水をこさするを馳走に致候。島田より一通書狀頼み置候。相届き候哉。云々とある。

名古屋へ入り、荷兮亭に泊る。越人と野水亭へ赴き、野水の隱居所普請の句を作る。荷兮亭にて、

世を旅に代かく小田の行戻り

野水隱居所支度の折ふし

涼しさを飛驒の工がさしづかな

涼しさの指圖に見ゆる住居哉

二句の内、越人と相談して、住居の方を取つたが、句は飛驒の工の方が勝れてゐると、芭蕉は云つてゐる。なほ杉風宛の手紙によると、名古屋は深川集を手本として若い者は修業し、俳諧の評判もあつたが、他に障る事があるからと云つて芭蕉は口を緘した。恐らく之は越人等の同門への悪口であらう。以前から彼等は芭蕉に對してとかくの噂があつたので、その氣持をほど

かうとして、芭蕉は名古屋へ立寄つたものであらう。

名古屋から荷兮・露川等に案内されて、佐屋へ水鶏を聴きに行つた。

水鶏なくと人のいへばや佐屋泊り

杉風宛の手紙によると、名古屋へ寄つて、三宿二日逗留、佐屋へ廻つた所、荷兮等例の連衆道で待ち受け、又佐屋へ半日一宿したとある。露川は享保二十年五月佐屋に水鶏塚を建て、表面に水鶏啼くの句を記し、右に芭蕉の略傳を刻した。その碑文によると、元祿八年（七年の誤）皐月の初（誤。五月十九日に島田を出立したものが、五月初めに佐屋へ來るわけではない。五月十九日以後でなければならぬ）予師の行脚を佐屋の宿に送り、山田何某の亭に五日をとめて（之も誤らしい。杉風宛の手紙に半日一宿逗留とある）水鶏の一卷を残す。云々とある。水鶏塚は今海部郡佐屋村にある。尾西鐵道の佐屋驛より凡二町、佐屋川の畔八幡宮の森の左手の境外にある。佐屋村誌によると、元祿七年閏皐月六日（誤であらう。杉風宛の手紙に五月二十八日に伊賀へ着いたとあるから、それ以前でなければならぬ。一説に六月の初といふが、六月は京へ入つて名所を見物してゐるから誤である）芭蕉は江戸から伊賀へ行脚の途中名古屋よ



芭蕉の精神

り熱田に出で、間遠の渡し（桑名、熱田間）に乗らうとしたが、五月雨で面白くなからうと勸められて、露川等に送られて佐屋の宿迄来た所、日が暮れかかったので、桑名へ渡るのもどうかと思つて、道邊の畠で物を洗つてゐる人に尋ねると、最早セツ下り（午後五時過）の時刻だし、こゝかしこで水鶏の啼く頃であらう、船番所の役人も引下がる時分であると云はれ、露川の友人の素覽亭（山田氏、庄左衛門）へ行く事になつた。こゝは閑静な土地で、晝でも藪のほとり、木の間かくれに、水鶏が啼いてゐる。水鶏笛を好んだ芭蕉も流石に恍惚とし、半句も出なかつたが、素覽に需められ一句を記した云々とある。此一巻は芭蕉・露川・素覽の三吟一折であつた。

苗の雫を舟に投げ込む

露川

杉風宛の手紙によると、それから芭蕉は伊勢長島にとゞまり、翌日久居まで行き、五月二十八日伊賀に着いた。なほ右の手紙のつゞきに、「同姓（兄半左衛門だらう）よろこび、舊友ども日々かけ合候て、今月（閏五月）十六日迄伊賀に逗留候て、云々」とある。竹人の全傳に、元祿七戌の歳、初、五月十九日尾張の方より、伊賀の國に歸り、閏五月雪芝（廣岡氏、通稱山

田屋市兵衛、上野の人、芭蕉の従弟）宅歌仙一巻、

涼しさやすぐに野松の枝の形

猿雖宅で、

柴つけし馬のもどりや田植樽

難波の之道（槐本氏、久左衛門、大阪道修町の藥種屋、伏見屋と云、入門は元祿三年無名庵に於てであらう）に訪はれ、

我に似なふたつに破れし眞桑瓜

伊賀を立つた芭蕉は、大和加茂の猪兵衛の在所に泊つた。閏五月二十一日、猪兵衛宛の手紙に、

當月（閏五月）十六日加茂へ參、平兵衛（猪兵衛の父）に一宿、御袋様（猪兵衛の母）、

源兵衛殿（猪兵衛の兄）、あねごなどへ逢申候。御袋御無事に御入候。されども四年以前

よりはよほど年も御寄、耳も遠く御座候。あねごとふたり貴様事のみくどくかへすく逢

申度由被申難義いたし候。云々

旅上人詩



二郎兵衛道中達者にて、拙者苦勞にもなり不申、能くつとめ申候。  
とあるから、猪兵衛の親兄弟に逢つたものと見える。

十七日(閏五月)大津へ行き、十八日(閏五月)から膳所に滞在、伊賀の親族方は暑いし、蚊も多いから、夏中は膳所、折々京へ出て去來と語り、或は嵯峨の去來屋敷へ休息する事もあつた(杉風宛手紙)。草臥もまだ止まないから、持病も起らない。だん／＼暑くなつて行くかどうかと思ふが、前々から服藥してゐるし、醫者も替へないでゐるから、病氣の事は心配するなどとある(同)。

嵯峨の落柿舎に遊ぶ。芭蕉・去來・酒堂・等六吟歌仙。

閏五月廿二日、落柿舎亂吟

柳小折片荷はすゞし初眞瓜

芭蕉

間引き捨てたる道中の稗

酒堂

村雀里より岡に出ありて去

去來

有磯海に、「元祿七年後の五月に、去來が許にて故翁に問對の折、此比難波の之道が参りて、

人々打寄り申捨てたるとして、見せ給ひし歌仙一卷、今續集の冠となし侍る。と記し、惟然、  
文章・支考等八吟歌仙。

落柿舎即興

牛流す村の騒や五月雨

之道

青葉吹き入る梅檀の花

去來

一枚のむしろに晝寢押合ひて

芭蕉

とある。又となみ山に、「蕉翁の落柿舎に寓居し給ひける比、尋ねまゐりて、主客三句の情を結び、立ちかへりぬるを、云々」と前書して、去來・浪花・芭蕉・之道・文章・支考等九吟歌仙(其時は去來・浪花・芭蕉の三吟三句だけであつたが、後皆が寄つて歌仙一卷とした)。

葉がくれをこけ出て瓜の暑さ哉

去來

野松に蟬のなき立つる聲

浪花

歩行荷持手振りの人と咄して

芭蕉

此時浪花入門。去來の紹介であつた。浪花は越中井波の瑞泉寺の住職、應眞院、一如大僧正の



芭蕉の精神

連枝、應々山人と號した。元祿十六年十月寂。三十二。支考の「霜の光」といふ追善集がある。芭蕉から支考に宛てた二十三日附の手紙によると、芭蕉は去來の煙管掃除の癖を笑つて、「今日去來させるの掃除、去來一世の初たる故、させるの掃除間五月と季を定めて、云々」(笈日記)と云つた。其頃支考は下京に居つたので、此手紙は支考への返信であらう。

人々と瓜の名所に遊び、

瓜の皮むいたところや蓮臺野

嵯峨へ赴き、人から漉團扇を借りて、

六月や嶺に雲おく嵐山

小倉山院

松杉をほめてや風のかほる音

清瀧眺望

清瀧や波に散り込む青松葉

大井川波に塵なし夏の月

大井川の句は、芭蕉が死ぬ前に支考に向つて、此句は園女亭に於ける白菊の塵(白菊の目に立て、見る塵もなし)に紛らほしい。之も亡き跡の妄執となるからと云つて、清瀧やの句に改めたものであつた。

六月十六日、膳所の曲翠亭に於て月見。芭蕉・曲翠・臥高・惟然・支考の五吟歌仙成。續猿

蓑に支考の今宵賦を出し、此歌仙を添へる。

夏の夜や崩れて明けし冷し物

芭蕉

露はばらりと蓮の椽先

曲翠

二十一日、大津木節(望月氏、稽翁と云、大津の醫)庵に於て、芭蕉・木節・惟然・支考の

四吟歌仙成。

秋近き心の寄るや四疊半

芭蕉

しどろに臥せるなでしこの露

木節

栗津の無名庵に立寄り、残暑の心、

ひやくくと壁をふまへて晝寢哉

旅上詩人



大津の本間主馬（丹野、能役者）の宅に至り、骸骨どもの笛や鼓をかまへて、能する繪を見

て、  
稻妻や顔のところが芒の穂  
日野山で追剝に逢ひ、上の衣を取られる。

剝れたる身には砧のひびきかな  
之は彦根の許六亭を訪れた時で、後盜賊その芭蕉なるを知り、彦根の少年に托して衣を送り返したといふ逸話がある。

七月、伊賀の郷里に赴き、盆會を營む。兄に招かれたのであらう。

家はみな杖に白髪の墓參

壽貞尼の死を聞き、

數ならぬ身とな思ひそ玉祭

壽貞の死を知つたのは六月二十日過ぎであらう。大津滞在の時だと云はれる。  
猿雖宅で土芳と共に稻妻の句を作る。

稻妻ややみの方行く五位の聲

女虎子（藤堂氏、藤堂家の臣）の宅に遊び、

風色やしどろに植うる庭の萩

二十八日、猿雖亭夜席、猿雖・芭蕉・配力等七吟歌仙成。

あれくゝて末は海行く野分哉

鶴のかしらをあぐる粟の穂

八月七日、望翠（上野町の人、井筒屋新藏）宅で歌仙、

里ふりて柿の木持たぬ家もなし

十五日、無名庵月見。

名月に麓の霧や田のくもり

名月に花かと思えて木綿鳥

今宵誰吉野の月も十六里

無名庵は赤阪町の兄、半左衛門の邸内にある草庵で、此時新築された。竹人の全傳に、新庵の



月見と題し、右の三句をあげ、「此三句庵を見すると、門人たれかれ多く招かれし時となり。云々」とある。

二十四日、望翠・惟然・土芳・芭蕉等八吟歌仙成。望翠亭興行か。芭蕉六句目より、大八の通りかねたる狭小路

猿雖

師走の顔に編笠も着ず

芭蕉

此卷は壬生山中金龍庵の什物となつた。金龍庵とは攝津荒陵山の北壬生山淨春禪寺の境内にある庵で、芭蕉浪花行の時一時寓居した場所である。次の雪芝・芭蕉・土芳等の六吟歌仙も什物の一となつた。

残る蚊に袷着て寄る夜寒哉

雪芝

餌舂ながらに見するさび鮎

芭蕉

九月二日、支考は伊勢より斗從を従へて伊賀に赴き、三日夜到着。竹人の全傳に、「其歲秋洛の惟然、伊勢より支考・斗從、熱田より白鴻來る。支考・斗從は九月三日也。」とある。蕎麥はまだ花でもてなす山路哉

松茸や知らぬ木の葉のへばり付く

芭蕉

秋の日和は霜でかたまる

元代

宵の月河原の道の中ほどに

支考

松茸の歌仙は芭蕉・元代・支考等九吟。

同じ秋無名庵で續猿蓑草稿吟味。句の仕方、人の請などの事土芳の云ひ出で、

顔に似ぬ發句も出でよ初ざくら

四日夜、某亭に會し、惟然・土芳・猿雖・芭蕉四吟歌仙一折。四句目より芭蕉出。

松茸や都にちかき山の形

惟然

雨に繩手のしるき秋風

土芳

おもしろく嘶す間に月暮れて

猿雖

まだ入人なき次の据風呂

芭蕉

松風に新酒をさます夜寒哉

支考



月もかたぶく石垣の上  
町の門追はるゝ鹿のとびこえて  
元説宅歌仙一折。伊賀にての歌仙納めと云。  
行秋や手をひろげたる栗のいが  
猿雖宅。

二八〇  
猿 雖  
芭 蕉

新葉の出初めてはやき時雨哉  
伊賀にて名残の畫讃、  
白露もこぼさぬ萩のうねりかな

三、奈良、難波行

九月八日、芭蕉は奈良の菊見をかね、大阪に立つた。又右衛門といふ男に荷物を持たせ、支考・惟然・次郎兵衛等を供にした。芭蕉の兄は此度は弟の體も餘程衰へてゐるやうだから心配して、支考・惟然等にくれぐれも介抱を頼み、後姿の見える迄見送つた。その日の中に奈良へ

入らうと思つて、笠置から川船に乗り、木津川を下り、錢司といふ所を過ぎると、山の腰が一面に蜜柑島なので、支考は先夜、「山は皆蜜柑の色の黄になりて」(五十韻、松風にの卷の二ノ表の五句目)と云つた芭蕉の附句を物語ると、芭蕉も眺めながら、我が吟腸を見せたと云つて笑つた。

船を下りて一二里行くと日が暮れたので、猿澤のほとりに宿を求めた。其夜は月も明るく鹿の聲も面白いので、猿澤の池のほとりを吟行した。

びいと啼く尻聲悲し夜の鹿

九日、奈良を立ち、暮に大阪へ至り、酒堂に宿る。

菊の香や奈良には古き佛達  
くらがり峠にて、

菊の香にくらがり登る節句哉

湖中の略傳に、「其所(くらがり峠)より大阪迄、駕籠に乗り、給ふ。難波の少しこなたより、駕籠を下りて、雨の菰に身をなして、云々」とある。雨に逢つたと見える。



芭蕉に出で奈良と難波は宵月夜

十日の朝から瘡かさをふるふ。九月廿三日、只半左衛門宛の手紙に、

私南都に一宿。九日に大阪へ参着。道中は又右衛門かげにて、さのみ苦勞も不仕、なぐさみがてらに参つき申候。大阪へ参候而の曉よりふるひ付申、毎曉七つ時分(午前四時)夜五つ(午後八時)まで、さむけ熱頭痛参候而、若しは瘡に成可申かと藥給べ候へば、廿日頃よりすきとやみ申候。云々

とある。

十三日、夜月見がてら住吉の榊市に行つた所、晝から降雨で、殊に惡寒を覚えるので月見中止。翌日の夜氣持が直つたので畦止亭(長谷川氏)へ行き歌仙興行。畦止・惟然・酒堂・支考之道・青流七吟。

榊買うて分別かはる月見かな

芭蕉

秋のあらしに魚荷連立つ

畦止

車庸亭に遊び、

面白き秋の朝寝や亭主ぶり

其柳亭にて、

秋もはやはらつく雨に月の影

二十一、二日の夜は雨がしよぼく降つて静かであつた。潮江氏車庸亭で、芭蕉・車庸・酒堂・遊力・惟然・支考等七吟歌仙一折。

秋の夜を打崩したる嘶かな

芭蕉

月待つほどは蒲團身に巻く

車庸

二十六日、大阪新清水の茶店(浮瀬四郎右衛門)に遊吟して、

人聲や此道かへる秋の暮

此道や行人なしに秋の暮

芭蕉

岨の島の木にかゝる蔦

泥足

旅上人詩

支考の笈日記に、「此二句の間いづれかと申されしに、此道や行人なしにと獨歩したる所、誰がその後に従ひ候はんとて、そこに所思といふ題をつけて半歌仙侍り。云々」とある。連衆は



芭蕉・泥足・支考・遊力等十吟歌仙一折。

松風や軒をめぐつて秋暮れぬ

芭蕉の精神

旅懷

此秋は何で年寄る雲に鳥

路通の行狀記に、「浪花の人々師を迎ふるその際いと珍しく、翁見むとて何くれかくれもてはやす程に、静かなる席も侍らず。天王寺・住吉の濱など、心に任せて遊び給ふ」とあつて此句がある。芭蕉の大阪行は當地の蕉門を活氣付けたものと見える。笈日記によると、此句は朝から心に念じて、下の五文字雲に鳥と苦心の果に成つたと云ふ事である。

二十七日、園女亭に會して、

白菊の目に立て、見る塵もなし

もみぢに水を流す朝月

芭蕉

園女

芭蕉・園女・諷竹・涓川・支考・惟然等九吟歌仙成。

二十八日、秋の名残を惜しみ、七種の戀を結題して、各發句する。

二十九日、芝柏亭に招かれたが出席せず、發句だけ贈る。

秋深き隣は何をする人ぞ

二十九日夜より泄痢の病起り、十月二日の朝に至り、五十回あまり下痢した。病源は園女亭で食つた菌の障りだと云はれてゐるが、伊賀を立つ時から寝冷えしたり、水にあたつたりして餘程體を痛めてゐたのであつた。それに此度の旅行は江戸を出立する時から、既に體は衰へて居て、とかく病氣にかゝり易かつたやうであるから、何も園女亭の菌を過食したから、急に死ぬやうになつたといふ譯でもなかつたのである。併し門人は驚いて芭蕉を大阪御堂前の花屋仁左衛門の裏座敷に靜養させ、看護につとめたけれどその甲斐なく、遂に十月十二日申の刻ばかり(午後四時)に眠る如く歿した。

體は衰弱してゐたけれど、西國行の意圖だけは元氣のやうであつた。九月十六日、去來宛の手紙によると、半左衛門が非常に心配して引止めるから、住吉の月見後は天の橋立まで行く事に云つてゐるが、實は九州へ渡る考で、當分内密に願ひたい。支考・惟然を連れて、彦山や薩摩瀉を見渡さうといふ考だから、君は自分より先に長崎に出向いて待ち受けて居つてくれとい

旅上人詩



ふ記事であつた。

## 六、行脚の掟

旅上詩人は芭蕉の前に西行もあり、宗祇もあつた。俳人として大淀三千風、高野幽山なども同時代に居たけれど、ひとり芭蕉は群を抜いて旅人の榮冠を擔つて了つた。芭蕉の旅癖は西行や宗祇の跡を真似たのだらうが、その旅行は極めて貧しいものであつた。去來に芳野行脚をするから金を二分借してくれ、但し返されないかも知れないと云つたやうに、行く先々から旅費を貰つて次へ次へと辿り歩いたものだらうと思ふ。尋ねて行く先の人は、大概一度は逢つて知つてゐる人だらうが、たまには會覺阿闍梨のやうな高貴な人や佛五左衛門のやうな篤實な人もあつて、其等の人達の同情に依て一夜の宿を求めて居た。今日と違つて昔は交通の便もわるく道路の修繕も不完全だらうから、或は草を分けて歩く事もあり、谷に添うて山林の濕つばい細道を傳はつて行くといふやうに、實際難義な危い旅だつたであらう。如行が後の旅に云ふ如く

千百餘里の嶮難終に頭を白うして、我里に移り給ふと云つた事は強ち誇張でもあるまいと思ふ。芭蕉は宗祇に私淑してゐたが、その宗祇と芭蕉との旅行振りを比較して見ると、貧富・權勢に雲泥の相違があつたらしい。應仁以來都は燒野の原の兵火に襲はれて、連歌師は種族の移動のやうに東へ西へと流浪し始めた。宗祇も其一人であつたが、行く所に物々しい武士の護衛を從へてゐた。例へば宗祇が伊勢を通つた時、隣國の關民部太夫何似齋と何某の合戦となつて、何某は宗祇を敵の領地境まで武士に護らせて送り、關の方でも亦宗祇を受取りに兵士を出して出迎へさせるといふやうな始末で、天下の詞宗は何の危げもなく自由に通り抜けられたのである。或は馬で或は駕で、相當の武士に護られて、旅行が出來たのは連歌師だけであらう。山伏を切つてかけたる關の前、そんな危険な運命は戰國時代の行脚僧には到る所見られる光景であつたが、宗祇などの連歌師は何の恐も感じなかつたのである。芭蕉はどうであつたらう。尿前の關を通る時だつて下手をすると首を斬られたかも知れない。而も平和の時代である。元祿の文化華やかなりし頃、如何に邊陲の地といへども、刀に血を見る事は嫌はれた事であらうが、怪しまれる所から考へると、芭蕉の姿が如何にみすばらしかつたかが分らう。宗潜でも宗長でも、



一晚泊つて大小名の連歌の御手合せをすると、翌日發つ時には莫大な贈物が貰へたのである。宿へ歸つても、置き場所に困る位な進物が積まれたのである。雁やうぐゐの吸物、それに捕りたての川魚、名酒が出る、風呂に入る、茶が振舞はれるといふ騒、まるで大名同然の持成であつた。連歌師は有難がつてそれを頂戴する。實に善美の饗應である。小春亭の一寸した御馳走でも、芭蕉は開き直つて訓戒するやうでは、連歌の御慰みはつとまらない。連歌師の昔から云へば、護衛兵の一人や二人は芭蕉に附けて奈須野の原の名所を案内してもよからうし、餞別の三兩ばかりの金は取つてもよい筈であるが、芭蕉は決してそれを喜ぶやうな人ではなかつた。宗祇の宿哉と云つて宗祇を慕つた芭蕉は、決して宗祇のやうな生活の人でもなければ人物でもないのである。櫻井永仙が宗祇を罵つて、「足なくて登りかねたる筑波山和歌の道には達者なれども」と云つたといふが、之は強ち永仙のひがみだとばかり考へられなかつたかも知れない。宗祇の弟子の宗長などは年々の収入の殖える事を喜んでゐたから、宗祇にも連歌は錢づくといふ卑しさがあつたのぢやなからうか。そこへ行くと芭蕉の人格は毅然としてゐる。彼は風雅の寂を堅く守つてゐる。寂は彼の生活の信條であり、藝術の基調であつた。彼の人生觀

は嚴肅であつた。深刻であつた。彼の行き方はすべてに於て宗教的であつた。

芭蕉の慕つてゐる能因は、裏庭で面を焦して、只今奥州から歸りましたと偽つて參内した男であつた。かく迄にして名所・舊蹟を探つたやうな事を云はなければ、名匠と呼ばれなかつたかと思ふと、氣の毒でもあり滑稽でもある。歌人は居ながらにして名所を知るといふ常套語があるが、和歌が千遍一律・大同小異のぬめりに墜ちて了ふ原因はそこにあつた。芭蕉が「東海道の一すぢも知らぬ人風雅に覺束なし。」(篇突)と云つた言葉は、體驗が詩作の源泉である事を告げてゐて、正直であるし、詩人としての堂々たる態度である。漂泊性、家庭を持たない芭蕉としては、行脚が唯一の慰藉であつた事は當然だらうが、その行脚が寂を盡してゐたものとするれば、芭蕉の詩囊は勝れたものを蓄へて居つたに違ひなからう。近畿地方の小天地に踏躑して、他の事情を解しない堂上歌人の、題詠的となつて、陳々相倚る状態は、居ながらにしての詠作が悪いのであるし、寂を知らない特權意識がいけなかつたのである。その點は宗祇は放たれた人であつたが、芭蕉ほど自由にはなり得なかつた。地位の慣習があつて、全くの庶民生活が出来なかつた點もあらう。



世に行脚の掟といふのが傳はつてゐる。之は行脚の戒であつて、十七條あり、芭蕉の眞蹟だと云はれてゐる。傳來の起源は奥州高久村の角左衛門の家に珍藏された。冠山侯の芭諧全集中宗周の説である。書に見えた所は鳥醉の五七記（寶曆十年刊）が古く、明和九年の科戸三杵の藤枝折には元祿戊辰春三月はせを桃青の署名があると。今蕉門七書から拔萃して見る。

第一條

一、一宿に再宿すべからず。あたゝめざる蕙を思ふべし。

第二條

一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず。すべて物の命をとる事なかれ。君父の讎あるものは門外に遊ぶべし。

第三條

一、衣類器財相應にすべし。過ぎたるも足らざるもしからず。

第四條

一、魚鳥獸の肉好んでくふべからず。美食珍味になれる人は他事になれ安きものなり。菜根

を咬かで百事をなすべき語を思ふべし。

第五條

一、人の需なきに己が句を出すべからず。望をそむくもしからず。

第六條

一、たとへ嶮岨の境たりとも所勞の念起すべからず。おこらば中途より歸るべし。

第七條

一、馬駕に乗る事なかれ。一杖の枯木を病脚と思ふべし。

第八條

一、好で酒をのむべからず。饗應にして固辭しがたきも、微醉にしてやむべし。亂いに及ぶの節迷亂起罪の戒、祭ひかりに昨ひかりを用ふるも醉へるにくみてなり。酒にさくるの訓あり。つゝしめや。

第九條

一、船錢茶代忘るべからず。



第十條

一、夕を思ひ旦あしたを思ふべし、且暮の行脚といふは好まざる事なり。人に勞をかくる事なかれしばくすれば疎あはぜらるゝの意を思ふべし。

第十一條

一、他の短をあげ、己が長を顯す事なかれ。人をそしりて己にほこるは甚賤しき事なり。

第十二條

一、俳談の外雑話すべからず。雑話出なばいねぶりして勞を養ふべし。

第十三條

一、女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬ事なり。此道に親炙せば人をもて傳ふべし。すべて男女の道を立つるのみ也。流蕩すれば人敬すべからず。此道は主一無適にして成す。能く己を省るべし。

第十四條

一、主あるもの一針一草たりともとるべからず。山川江澤にもそのぬしあり。つとめよや。

第十五條

一、山川舊跡したしく尋ね入るべからず。私に名をつけることなかれ。

第十六條

一、一字の師恩たりとも忘るゝ事なかれ。一句の理をだに解せずして人に教ふるは己をなし  
てのちの事也。

第十七條

一、一宿一飯の主もおろそかに思ふべからず。さればとて媚び諂ふ事なかれ。如斯の人は世の奴なり。此道に入る者は此道の人に交るべし。

以上見渡す所、行脚の掟と云つても、必ずしも旅人の訓戒とばかり見えない條項も含まれてゐる。旅行に關係の無い日常の心得と思はれるやうな條目も少くない。成美は隨齋諧話に、「右の掟書も芭蕉の筆力に似ず。されば後人の偽作と思はるれど、云々」と論じてゐるが、ただ筆力といふ點からではなく、事實が芭蕉の生活に反してゐる所もあつて、偽作たる事は疑ふ餘地もないと思ふ。例へば第一條の一泊に再宿すべからずである、芭蕉にはそんな例はなかつた



熱田の桐葉の鳴海の知足、京の落柿舎、大津の乙州、其等の住居には再宿も三宿もしてゐる。第二條、腰に寸鐵を帶ぶべからず、芭蕉は風流行脚であるから寸鐵を帶ぶる必要もない。君父の仇などと云つてわざ／＼堅苦しく斷はるやうな芭蕉とは思へない。甲子吟行に、「腰間に寸鐵を帶びず。襟に一囊をかけて、手に十八の珠を携ふ。」とある言葉から捏造して、行脚の掟に附會したものらしい。第三條、旅行に關係なし。第四條、芭蕉の平常から推量した言、延寶末年「丈夫は菜根を喫し、予は乏し」といふ前書があつて句がある。その附會か。第五條、旅行に關係なし、第六條、奥の細道を読んでも、「瘦骨の肩にかゝれるもの先づ苦しむ。」或は「草臥れて宿借る頃や藤の花」などの例があるから、平地を歩いても所勞の念は起してゐる。まして嶮岨へ來ては身に堪へたらうと思ふ。但し途中から引返してはゐない。第七條、全然虚妄の言である。元祿元年の大和行脚に於ける意專宛の手紙に、駕籠四十里とあるし、細道行脚の際奈須野を通る時も馬に乗つてゐる。其他數へれば其例はいくつもあつた。第八條、旅行に關係なし。捏造説。第九條、旅の常識、併し芭蕉は茶代を一々置くかな。第十條、隨分長逗留して迷惑のかかつた事であらう。第十一條、物言へば唇寒し秋の風からの捏造説。第十二條、俳席の

掟、芭蕉が云つたものか、實行したものか分らない。第十三條、智月・羽紅・園女の弟子がある落柿舎で羽紅と蚊帳を一つにした事さへある。虚妄説。第十四條、道端に美しい花が咲いてゐれば折つたかも知れない。第十五條、虚妄説、奥の細道を読んで知るべし。第十六條、旅行に關係なし。一句の理を解せずして人に教ふるなど、如何なる場合でも芭蕉は行はない。第十七條、普通事、芭蕉の言を待たなければ、又芭蕉も強ひて言ひもしない。

行脚の掟、以上の如く愚な言である。芭蕉に假託して後人の説いたもの明かである。一體芭蕉は行脚の掟などと云つて堅苦しい規則を立てる人物ではない。禮義作法を知る事はすべての常識で分り切つてゐる。弟子にあやまちがあれば靜に説くが、さもなければ捨て、置く人である。



附

錄



# 芭蕉の研究参考書目

## 明治以前に成つたもの

### 一、全集

俳諧一葉集 古學庵佛令 幻窓湖中 共編 弘化二年刊 小菊本 九冊、

芭蕉一代の作を集めたもの。前篇に發句、附合、後篇に紀行、消息、遺語を収める。

俳諧袖珍鈔 黙池編 嘉永五年刊 三ツ切本 七冊

一葉集の例に倣ひ、芭蕉の發句、附合、文章、消息、句評、紀行、遺語を集める。一葉集に於て除外された翁反故を採録した。

玉田集 鱸魚都里編 稿本 大本 二冊

發句、附句、文章を集める。

### 二、發句集、その註書

泊船集 風國 元祿十一年刊 半紙本三冊

芭蕉翁道の記（野ざらし紀行）と四季の發句を収める。發句は誤記もあるが、句集刊行の最初のものであつた。

泊船集註解 輕花坊著 文化九年刊 半紙本五冊

泊船集の註書、句註は文字の下に口語で補註する。蘿月編 奥の細道 芭蕉翁文集（改造文庫、昭和四年刊）の附録として採録される。

芭蕉句選 華雀編 元文四年刊 半紙本二冊

芭蕉の發句六百七十餘句を四季に配列する。

芭蕉句選拾遺 寛治編 寶曆六年刊 半紙一冊

芭蕉句選に洩れた發句百二十餘句を四季に配列する。句の傍に年代を記す。

芭蕉翁發句集 蝶夢編 安永三年刊 半紙本二冊

伊賀上野の人、土田梨風所持の土芳自筆の芭蕉の句集により、年代順に配列したもの。なほ本書には寛政元年刊の小本二冊の類題本もある。



なまかまど 龜文編 安永五年刊 半紙本一冊

芭蕉の發句に。去來・其角・嵐雪・丈草・涼菟・乙由の句を附記する。

もとの水 井上重厚著 天明七年刊 半紙本一冊

一名芭蕉翁發句集。重厚の序に、自分は芭蕉の句選に洩れた句帖を持つてゐる。兔園雜事と呼んでゐる。今年鹿島行脚の頃、下總馬橋の立砂に與へて出版させたとある。芭蕉の發句九十六、消息十一篇を收める。版下は夏目成美の筆。

俳翼 籬島秋呈編 寛政七年刊 三ツ切本二冊

乾之卷に芭蕉四季の發句を收め、季寄を添へる。

芭蕉袖日記 素綾編 寛政十一年刊 小本一冊

芭蕉の發句八百六十餘を年代順に並べたもの。

青於集 楚山編 享和三年序 半紙本五冊

芭蕉の發句と大鶴の發句とを載せる。

芭蕉翁發句類題集 松竹編 弘化元年刊 三ツ切本 一冊

芭蕉の發句一千二百餘を集める。百五十回忌出版。

芭蕉翁發句拾遺 梅尺編 延享二年稿 一冊

泊船集の訂誤をかねて編んだものと云はれる。

新撰翁草 編者未詳 安政五年成 半紙本一冊

華雀の芭蕉句選を増補したもの。

芭蕉翁句鑑 編者未詳 刊年未詳 横本一冊

芭蕉の發句一千二百三十餘章を集め、年代順に並べたものだが信じられない。

芭蕉發句評林 杉雨編 寶曆七年刊 半紙本一冊

芭蕉の發句百餘章をあげ、その故事を説明したもの。

芭蕉翁句解 大島蓼太著 寶曆七年刊 半紙本二冊

芭蕉の發句百句ばかりを四季に分ち註解したもの。

師走囊 西戎閑人著 刊年未詳 半紙本一冊

附會の説多く信じられない。



説叢大全 溝口素丸著 安永二年刊 大本五冊

師走囊の説を難じ、評林・句解の説を評し。親切に出来てゐる。俳文學大系註釋篇所收。

金華傳 康工著 安永二年刊 半紙本二冊

芭蕉の句解であるが、後人の類句をあげ、或は格調の變化を論じなどしてゐる。

過去種 鷗洲著 安永 年稿 大本四冊

芭蕉の發句を立句として歌仙を卷く。頭書に發句の註がある。

芭蕉發句苗堀 梅丸著 天明二年刊 半紙本二冊

故事の説明に過ぎず、要領を得ない。

朱紫 吾山著 天明四年刊 半紙本二冊

街學的な註である。附録に隨筆を附ける。

芭蕉翁發句諸抄大成 天明四年刊 半紙本五冊

評林・苗堀・朱紫の三部を合冊したもの。

芭蕉新卷ちよまき 蠶外偏 寛政五年刊 半紙本二冊

四季の類別略註である。故事を附會した所がある。

桃青翁句彙 巢居著 寛政十年刊 半紙一冊

仙臺の巢居の註を、近江の干當が増補したもの。故事の引用だけ、自註はない。後篇は文

化三年刊、半紙本一冊。

芭蕉句選年考 石河積翠著 寛政 成 寫本九冊

芭蕉句選の句を諸書によつて註解したもの。芭蕉發句の註書として最も勝れてゐる。別に

漣々の寫本もある。明治四十四年洒竹、瓊音の校訂本が行はれてゐる。

芭蕉翁發句蒙引 杜哉・字考・有免共編 享和二年刊 半紙本一冊

簡明な註がよい。

芭蕉發句解 莊丹著 文化三年刊 半紙本三冊

嵐雪、其角の發句撮解と合冊し、「三家發句解」として行はれる。

芭蕉翁句解參考 茂呂何丸著 文政十年刊 小本五冊

芭蕉一代の發句一千二百餘章を諸書によつて註解したもの。引用書百七十餘種、努力した



割には要領を得ない。芭蕉の句でないものも入つてゐる。

よしなし草 白翁著 文政十一年序 半紙本一冊

蘭亭白翁の追善出版であるが、内に芭蕉の發句九章、其他門人の句を註してゐる。

俳諧一串抄 亦夢著 天保元年序 半紙本二冊

乾之卷に芭蕉の句解がある。

蕉句雙説 蓬山著 天保八年刊 半紙本二冊

故事の引用が煩しくないだけよい。俳文學大系註釋篇所收。

俳諧飛登理古都 吞吐癩人著 寶曆十三年序 寫本一冊

芭蕉の發句解である。

三、連句集並に註書

芭蕉翁附合集 蓼太編 安永五年序 小本二冊

芭蕉の連句を脇句、第三の體といふやうに上げたもの。

芭蕉翁附合集 蕪村編 安永五年刊 半紙本二冊

蓼太の書より數は少ない。

芭蕉翁俳諧集 蝶夢編 安永五年刊 半紙本三冊

延寶、天和から元祿に至る迄の芭蕉の連句を抄録したもの。

俳諧桃の白實 車蓋編 天明七年序 小本一冊

諸集に洩れた芭蕉の歌仙十二卷を集める。

俳諧幽蘭集 曉臺編 寛政十一年刊 半紙七冊

冬の日以後の連句を諸集から集める。

俳諧奥の枝折 柳條編 享和三年刊 小本二冊

芭蕉の奥の細道に洩れた發句・附合を主として集めたもの。

金蘭集 甘井編 文化三年刊 枕本二冊

金澤の萬子の遺稿中にある芭蕉の連句百餘卷を、一菊といふ法師の寫したもの。

芭蕉袖草紙 奇淵編 文化八年序 枕本三冊



杉風の藏書であるといふ。年代順に並べ、出典をあげる。附録に元祿以降の諸家の發句を添へる。

俳諧玉葉集 仙鳥集 文久元年刊 三ツ切本一冊

芭蕉の連句を伊呂波別に並べたもの。

芭蕉松島歌仙 雲南編 明和八年序 半紙本一冊

松島に於ける芭蕉の獨吟歌仙一卷、奥の細道の際白河・須賀川に於て作つた芭蕉・栗齋等躬・會良・等雲・須竿・素蘭の歌仙一卷。附録として晋流の傳、雲南の四時吟を收める。芭蕉は松島で獨吟歌仙を作つた。其後最上川を渡らうとして、大石田で日和を待つた時、卷の末をついで野夫村老に與へた。會良の筆であつたといふ。後年乍單齋等躬之を大石田の何某より求め祕藏したが、等躬歿後三四年を経て、子息乍跡之を晋流に與へた。晋流梓行の志があつたが、果さずして歿したので、門人雲南之を出版した。雲南の跋に、「萬にひとつ偽書たるに於ては、予も亦和歌三神の御罰を蒙るべき事明けし、云々」とあるが疑はしい。

蕉翁獨吟五歌仙考 幽嘯編 文化八年序 半紙本一冊

芭蕉の松島歌仙は相樂等躬の作なる事を斷じたもの。歌仙五卷をあげ、頭註に於てその非を正す。

繪歌仙 宜麥編 文化七年刊 大本一冊

續繪歌仙 同 文化八年刊 大本一冊

芭蕉の連句を古集より選み、附意を繪にて表し、支考の七名八體の説明を加へたもの。

芭蕉翁附合評註 石兮著 文化十二年刊 小本二冊

芭蕉の連句を脇、第三、四句目といふ順序で註解したもの。蓼太の附合集に基く。

四、句合並に句評

貝おほひ 宗房判 寛文十二年刊 一冊

伊賀上野の天満宮奉納三十番句合である。流行小唄、奴詞を用ひ、遊蕩的な判である。芭蕉の處女作。種彦書入の自筆註本がある。江戸で出版された。

六 番句合 桃青判 延寶六年成 寫本一冊  
十二番句合



何人の句を合せたものか未詳。寫した人も未詳。奥書の署名に座興庵桃青とある。

江戸俳諧合 桃青判 延寶八年刊 二冊

其角の田舎句合と杉風の常盤屋句合である。

續つぎの原 不卜編 貞享四年刊 大本二冊

上卷に素堂・調和・湖春・桃青を判者とした十二番づつの句合がある。

あきの夜 完來編 延享四年序 半紙一冊

最初に芭蕉句評一軸がある。樂水軒の序によると、潜淵庵不玉の獨吟歌仙一卷に芭蕉の判詞を加へたもので、後原本焼失し、二本某より一本を乞うて寫したとある。奥書に 元祿六年春中芭蕉庵桃青とあるが疑はしい。

俳諧花の故事 闌更編 寶曆十三年刊 半紙本一冊

貞享三年初懷紙の卷頭吟百韻中の五十句に芭蕉の註を加へたものが出る。

俳諧葉落考 闌更編 明和八年刊 半紙本二冊

上卷に初懷紙註がある。之は裏に撰した「花の故事」所載の初懷紙註の書寫の誤を訂正したものである。

八九間雨柳 李東編 文化八年刊 半紙本一冊

續猿蓑中「八九間空で雨降る柳かな」の歌仙の草稿で、芭蕉の添削がある。

山中集 やまなかしう 可大編 天保十年刊 半紙本一冊

元祿二年秋加賀の山中温泉で、北枝・會良・芭蕉の作つた三吟歌仙の草稿で（燕歌仙といふ）、芭蕉の添削並に評語がある。

む都のゆかり 江三編 萬延元年刊 半紙本一冊

内に猿蓑集の草稿がある。末に、「右猿蓑集草稿祖翁の添削朱にて書入の本、碓華禪師其門生へ授與し給ふを、其社徒引ほどき、剪斷分配して掛物等に標裝し、今所持する者あり。實に可レ惜。云々」とある。



野ざらし紀行 芭蕉著 明和五年刊 半紙本一冊

貞享元年の紀行である。蘭亭白翁の「よしなし草」に、「この紀行を甲子吟行とありて、其頃印刻なければ、人々書寫してあやまり傳へたる多し。既に明和五年月下といふ人、甲子吟行の寫本を持てりけるにや、上木して標題を野ざらし紀行とせし小冊子を出せしが、あやまり多く、句はもとより祖翁の門人の名さへ書き違へたる多し。云々」とある。

甲子吟行 芭蕉著 安永九年刊 大本一冊

去留の全集に、瀾潤云、「安永九年庚子、多少庵秋瓜が門人波靜が刻せし眞蹟には甲子吟行と題す。翁の眞蹟を模し、繪は略して、此所山あり、此所川などとするす。」とある。

野ざらし紀行翠園抄 石河積翠著 文化十年刊 半紙本一冊

故事の註解である。

鹿島詣 芭蕉著 寶曆二年刊 大本一冊

貞享四年芭蕉の根本寺遊歴の紀行である。松籟庵秋瓜潮來の本間畫江の藏する眞蹟を、證治準繩といふ醫書と交換して模刻したもの。

かしま紀行 芭蕉著 寛政二年刊 半紙本一冊

杉風の家に藏する芭蕉眞蹟を、採茶庵梅人の拓本として出版したもの。

鹿島詣 芭蕉著 文化十年刊 半紙本一冊

本間家五代の自準が別に拓本として出版したもの。

笈の小文 芭蕉著 寶永五年刊 半紙本一冊

貞享五年芭蕉の吉野紀行である。大津の乙州の出版したもの。

さらしな紀行 芭蕉著 寛政十一年刊 半紙本一冊

元祿元年秋芭蕉更科の月見である。元祿十一年杉風の奥書あるものを、梅人の出版したもの。

さらしな紀行眞筆敷寫 芭蕉著 大本一冊

百我の敷寫しである。寫年未詳。奥書に、「右さらしなの紀行一軸、芭蕉翁眞筆無紛候。尤下書にて、一入おもしろく候。庚子の春二月、木翁尙白誌」とある。

奥の細道 芭蕉著 元祿十五年刊 榊形本一冊



芭蕉の奥羽紀行。素龍の清書したものを井筒屋の出版したもの。井筒屋本と云はれる。

同 芭蕉著 明和七年刊 同

蝶夢が伊賀上野旅行中に得た一本で、素龍の跋、去來傳書の跋がある。去來書寫本、或は蝶夢本と云はれる。

同 芭蕉著 刊年未詳 半紙本一冊

江戸の櫻壽軒といふ人が、芭蕉の眞蹟を拓本にして出版したもの。跋に、「此一書芭蕉眞蹟は武陵古き俳家の珍藏なるを、風友鶴峰堂のあるじ、公務のいとま摹して予に送らる。…白字にもものして、なほはた世に顯さん事を、同志の頻に勸むるに應じ、櫻壽軒の窓下に謹んで刀をことぶき畢りぬ。」とある。櫻壽軒本と云はれる。

同 同 明治十八年刊 大本一冊

奥書に、「元祿十年冬其角寫於大坂旅店灯下校合畢。」とある。偽書であらうといふ説もあるが、明治十八年永機が落丁一枚あつたのを補筆して、其角の書そのままを摹刻したといふ説もある。其角書寫本と云はれる。

異本奥の細道 關更編 天保十四年刊 一冊

卷頭に「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」の句を出す。此の種の本は他に一二見えた。

百家 交筆 おくの細道 三津人編 文化十二年刊 半紙本二冊

樗堂・成美・月居・奇淵・士朗等當時の名流百俳士を選び、細道の文一節を書かせ、それに巢兆・松年等の知名畫家の繪を挿入したもの。當時名流の筆蹟を知る上に参考とならう。

繪入奥の細道 文政五年刊 半紙本二冊

深川の畫家交山、香雪の畫いたもので、芭蕉庵出立から大垣入り迄、それ／＼本文に適した繪を入れたものである。交山粗畫、香雪密畫の取合せも面白い。

奥細道菅菰抄 梨一著 安永七年刊 半紙本二冊

上卷は越中富山の直生といふ者に草稿を奪はれ、後記憶を辿つて書いたものであると。古來有名な書であるが、故事、出典の註解にとゞまり、物足りない。

同 附録 同 文政十二年寫 半紙本一冊

少波の書寫。菅菰抄の奥附に、追而出來とあるが、刊行されなかつたものらしい。内に細



道行脚中發句（附句）拾遺、祖翁行脚掟、壺碑圖、木曾義仲願書、義仲副書加州小松八幡宮寶物縁起其他がある。

鼈頭奥之細道 鶯宿著 安政五年刊 大本二冊

本文に頭註を加へただけ。蕪村の畫の模刻が入る。

奥細道通解 馬場錦江著 安政五年序 大本三冊寫

自筆稿本は四卷二冊物で、最後の一卷を缺き、太田神社參詣の條迄しか註がない。從來の

註書中最も親切、丁寧に出來てゐる。但し本文の辭句が普通の原本に比して甚しく相違す。

おくのほそ道引證 谷川護物著 半紙本一冊 稿本

内題に「奥廼細美知考」とある。護物の自筆本といふ點が珍らしいだけ。註も舟を借りて

松島に渡る云々といふ所までしかない。成年未詳。

嵯峨日記 芭蕉著 寶曆三年刊 半紙本一冊

元祿四年四月去來の落柿舍寓居の日記。郡山魯玉の出版にかゝる。

六、文章、書翰（遺稿）

本朝文選 許六編 寶永三年刊 大本五冊

芭蕉及び一門の文を收める。芭蕉の猿蓑文集の遺稿によつて編纂したもの。

風俗文選 同 大本九冊

支考の勸告により、本朝の二字を風俗と改め、又路通の抗議により、路通の返店、文を削除して改版したもの一般に行はれる。

風俗文選犬註解 甘我著 嘉永元年刊 大本五冊

古人の眞蹟を入れ、詳しく註解してゐるが、賦の部までの註で終つてゐる。

風俗文選通釋 錦江著 嘉永 年稿大本

風俗文選の註本中最も善本である。未刊行國文學註釋全書所收。

本朝文鑑 支考編 享保三年刊 大本五冊

古今名家の文を集めたものであるが、所載の芭蕉の文に就ては疑しいものもある。

和漢文藻 同 享保十二年刊 大本五冊



所載の芭蕉の文に就ては、前書の如く疑はしいものが多い。

芭蕉文集 小林風徳編 安永二年刊 半紙本二冊

芭蕉の文三十九篇を収める。地の巻に常盤屋句合を載せる。

蓬萊島 関更編 安永四年刊 半紙本三冊

芭蕉の文集である。

芭蕉翁文集 蝶夢編 安永五年刊 半紙本二冊

芭蕉文選、笈の小文、風俗文選、本朝文鑑、和漢文藻等により芭蕉の文を拾得し、三十九篇を収める。

あしのひともと 護物著 文政十年刊 大本一冊

幻住庵の註解で、口繪に草庵から湖水を眺めた圖が出てゐる。

幻住庵記註 雁來著 文政四年序 半紙本一冊寫

幻住庵記の末に、筆者不明の手紙が入り、「先頼む椎の木もあり夏木立、篤老師の加筆也。それよりして後は雁來なれば誤り勝ちなるべし。云々」とある。良書ではない。

幻住庵記略註 果樹園道舊註 大本一冊寫

寫年未詳。奥書に、「此書果樹園道舊の註解せられしを、閑樹園菊雄筆を採りて校合し、草稿として秘し置かれしを譲り受けて藏するものは殘月軒の主伴鷗。」とある。語句出典の引用註である。

幻住庵記私解 櫻門註 半紙本一冊稿

成年未詳。語句の詳解である。貼紙書入多い。

芭蕉翁消息集 関更編 天明六年刊 半紙本一冊

加賀、近江に傳はる芭蕉の書翰二十餘通を収める。

翁反故 松岡大蟻編 天明三年刊 半紙本一冊

美濃梅石宛の芭蕉の書翰百餘通を出版したもの。全然信じられない。

芭蕉翁三等文 蝶夢著 寛政十年刊 半紙本一冊

芭蕉の曲水に宛て、風雅に三等の別ある事を示した書翰の註解である。



甲子夜話（續篇卷三十九）松浦靜山著 文政四年起稿

芭蕉が芳野紀行の際京より伊賀の猿雖に遺した手紙が載せてある。奈良から京へ入る迄の動靜が詳しく出てゐる。甲子夜話には其他殉死の禁（卷二十一）東盛寺の草庵（卷六十四）などの資料が見えた。

三冊子 土芳著 安永五年刊 半紙本三冊

土芳が芭蕉の俳話を記述したもの。白・赤・黒の部に分かち、闌更の出版にかゝる。既説に自説を交せて記してゐる。

蕉門俳諧語録 蝶夢編 安永六年刊 半紙本二冊

芭蕉の遺語及び門人の説を諸書より拔萃したもの。

俳諧芭蕉談 文曉著 享和二年刊 半紙本二冊

文曉の憶説で信じられない。

俳諧正語抄 琴而編 文政十二年刊 半紙本一冊

琴而の序に、「此一巻は羽黒呂丸の家に傳へて、年久しく煤びて虫のすみかとなれるを、赤谷の湖山取出し來りて、予が若き頃父なる荷曉に見せける。くり返し見て曰、こは越中の國に人も名も高き浪化公の漫筆にして、祖翁の正語を擧げて、專正風體の意を示されたるにて、此道の規範と云ふべし。云々」とあるが疑はしい。内に芭蕉の逸話八篇餘を入れる。

七、傳記並に行狀

歴代滑稽傳 許六著 正徳五年刊 半紙本一冊

守武、宗鑑、貞徳、宗因、芭蕉に至る迄の俳風の變化を列傳的に説いたもの。

芭蕉翁全傳 川口竹人著 寶曆十二年刊 半紙本一冊

伊賀上野の人竹人が、土芳と竹人の兄景賢の口傳によつて書いたもの。近來芭蕉傳研究の最も善き参考書とされてゐる。

芭蕉翁傳 梨一著 安永七年刊

菅菰抄の卷頭にある研究である。伊賀の桐雨の筆記、既白坊の覺書によつて述べたもの。



芭蕉翁 繪詞傳 蝶夢著 寛政五年刊 大本三冊

参考すべき記事もあるが、元來挿繪を主とした美文に過ぎない。

芭蕉翁略傳 貞松著 寛政五年刊 小本一冊

小冊子ではあるが、参考すべき所もある。

芭蕉翁正傳 泊船居竺坊著 寛政十年刊 小本一冊

伊賀の傳説によつて書いた芭蕉の略傳である。参考すべき點もある。口繪に芭蕉の像、挿繪に木魚、水鶏笛、麝の圖入る。

芭蕉翁全集 松平冠山著 大本一冊寫

奥書によると、冠山には芭蕉一代の研究書數十部あるが、本書はその十七卷目に當るもので、直筆の草稿を芭蕉の舊主家に送り、校訂を乞うた云々とある。なほ文政八年十二月九日、碗棠蘭圃、文政十年五月阪倉重之など、轉寫の事情を記す。異説もあるが、一参考にならう。

芭蕉翁行住略記 稗庵八朶著 天保三年刊 折本一冊

先に著した「芭蕉翁行住歳時考」を簡單にしたもの。

芭蕉翁略傳 湖中著 野巢校 弘化二年刊 半紙本二冊

芭蕉生立より終焉迄の生涯を年代順に記したもの。卷頭には破笠畫の芭蕉像、奥の細道中會良と別れる時の句の眞蹟を掲げる。古來有名な書で、良書である。

芭蕉庵春秋 中島素蓮著 嘉永六年正月起稿 半紙本二冊

未定稿。元祿元年九月迄しかない。芭蕉の年表的研究である。廣く古書を引いて考證し、頗る参考とするに足る良書である。

俳諧道の杖 卓朗著 半紙本一冊稿

年表的芭蕉傳の考證。

芭蕉翁一代錄 著者 成年未詳 半紙本一冊寫

芭蕉傳の研究。甚しい異説もあつて、信じられない點もあるが、一参考とならう。卷末に四山瓢、麝の圖、二見形文臺、松木文臺、尾花文臺、反古文臺、二見瀉文臺、貞徳翁文臺、鐵如意、竹柄如意、硯宮、木魚、水鶏笛、等の圖が出る。



芭蕉全傳 尾崎五柳著 大本一冊稿 成年未詳

始に年表をあげ、次に全傳となる。特に留意すべき説もない。朱書入其他がある。

枯尾花 晋其角著 元祿八年刊 大本二冊

上卷に芭蕉終焉記、十月十八日義仲寺に於ける追善興行、京、近江、伊賀連の追悼吟、下

卷に嵐雪、杉風、桃隣等の追悼歌仙を收める。

笈日記 支考著 元祿八年刊 半紙本三冊

卷初の芭蕉病歿前後の記事が参考になる。

芭蕉翁行狀記 路通著 元祿八年刊 半紙本一冊

芭蕉最後の旅の記事に詳しく参考になる。次に乙州、智月一派との連句、發句を収めてる。笈で顔をかくした芭蕉像入る。寶曆元年紀逸の再刻本もある。

芭蕉翁追悼こがらし 壺中、芦角編 元祿八年刊 半紙本一冊

風國門らしい壺中、芦角の追善集である。編者は元祿四年頃芭蕉に入門し、始めは尾張の荷兮や越人と親しく、教を受けて居つたらしいが、其後芭蕉と遠ざかり、同門の人ともう

とく、遂に風國門になつたやうである。芭蕉に関する珍らしい話も出てゐて参考になる。

翁草 里圃編 元祿九年刊 半紙本二冊

芭蕉の追善集である。芭蕉に師事する僅に一年なりと。

翁反故 文曉著 文化七年序 半紙本二冊

一名花屋日記、芭蕉翁反古文、芭蕉談終焉實記と云はれる。芭蕉終焉の前後の事情を記したものであるが、文曉の作り事多く、信用は出来ない。

蕉門頭陀物語 建部涼袋著 寶曆元年刊 大本一冊

三十三章より成り、内芭蕉に關する逸話八章、他は門人の逸話である。記事は小説的で信じられない。

蕉門昔語 既白著 明和二年刊 半紙本二冊

隨筆的に書いたもので、参考すべき話柄もある。

俳諧世説 關更著 天明五年刊 半紙本五冊

關更の序によると、今から二十年前加賀金澤を去る四里ばかりの地に湯湧といふ温泉があ



つて、そこで北枝の書を残したものとや希因に聞いたものを集めて、正風人物誌と題したが後に俳諧世説と改名して出版したとある。全篇五十一章の内、芭蕉に関する逸話二十章を収めてゐる。頭陀物語と異り、此方が信じられる。

行脚怪談袋 著者未詳 成年未詳 半紙本二冊寫

全篇二十三章の内、芭蕉に関する逸話十五章ある。全然無根な話多く、通俗小説の觀がある。

佛家奇人談 玄玄一著 文化十三年刊 大本三冊

中卷に芭蕉傳がある。逸話本位のもので、秀句をあげる。内に芭蕉の画讚、頭陀箱の畫を示し、頭陀箱の形狀、傳來を詳説してゐる。

八、墨蹟、遺物、遺跡(句碑)

芭蕉翁文臺圖 桃鏡編 寶曆十二年刊 大本一冊

曾良に傳へた二見文臺の模畫がある。

芭蕉翁眞跡集、同 明和元年刊 大本一冊

諸家の秘藏する眞蹟を模刻したもの。蓼太の出版にかゝる。眞蹟すべて四十六通、各所藏者の名を記す。

芭蕉杉風兩吟百韻 寛美編 天明六年刊 大本一冊

延寶七年の草稿の模刻で、添削の跡の見えるのが面白い。

芭蕉門故人眞蹟 蝶夢編 寛政元年刊 大本二冊

芭蕉、蟬吟、半左衛門其他蕉門諸家の眞蹟を義仲寺に寄進した模刻。

花は櫻 聽雨編 寛政十三年刊 半紙本一冊

芭蕉所持の木魚、水鶏笛の模刻を入れる。

栞集 成蹊編 文化九年刊 半紙本一冊

採茶庵梅人十三回忌追善集であるが、内に芭蕉翁眞蹟の石摺が出る。眞蹟は四季の發句三十四章を集め、貞享丁卯(四年)秋芭蕉翁桃青とある。

芭蕉翁年鑑 頑夫編 嘉永三年刊 大本一冊



桃鏡の眞跡集の一部を刷つて改題したものと。

眞澄鏡 白亥編 安政六年序 半紙本一冊

内に芭蕉の高山傳右衛門藥塙に與へた俳諧作法の教を述べた眞蹟模寫と芭蕉翁自畫讚一軸が入る。

むつのゆかり(再出)

内に奥羽行脚の際芭蕉の用ひた頭陀と如意の圖、「かさしまやいづこ」の句の芭蕉眞蹟の石摺、「船いそぎなれも汐干に行人か」の前書附の句の眞蹟模寫、狐題して云、云々の句文の眞蹟石摺がある。なほ此の前書附の句の裏に碓花禪師の識語がある。

冬扇一路 鳥醉編 寶曆八年刊 半紙本一冊

伊賀上野の無名庵、蓑虫庵の記事がある。「伊賀實錄」附載。

壬生、山家 同 寶曆九年刊 半紙本一冊

攝津荒陵山北、壬生山淨春禪寺は家隆の舊跡で、天正十四年寶鑑禪師の開基、萬治二年豊

山和尚再建する。一隅の松下に芭蕉の古碑があつた。何人の建立か詳かでないが、昔芭蕉浪花行脚の際旅寓とした。芭蕉名けて金龍庵と云つた。遷化の後病床の具を茶毘に附し、一壺に入れて埋藏し、記念として石碑を建てた。金龍庵には芭蕉短冊一枚、續猿蓑上之巻芭蕉加連の歌仙草稿等を什物とする。鳥醉は寶曆八年七月から同九年二月まで金龍庵に籠り句作も、芭蕉の句碑追善集なる本書を出版した。

芭蕉庵再興集 蓼太編 明和八年刊 半紙本一冊

雪中庵蓼太芭蕉庵の荒廢を歎き、舊庵に程近き要津寺の門前引き入りたる所に芭蕉庵を再興し、塚を築き、木像を安置し、毎年忌日の俳諧興行を催した。本書はその記念出版である。芭蕉庵の圖入。

寫經社集 蕪村編 安永五年刊 半紙本一冊

洛東一乘寺村金福寺の境内芭蕉庵を再興したもの。

故郷塚百回忌 伊賀連中編 寛政五年刊 半紙本一冊

松尾家の菩提所愛染院に於ける故郷塚で、百回忌の追善興行をした時の出版。



鮫洲抄 春秋樓編 天保十二年刊 半紙本一冊

品川鮫洲の天林山泊船寺は、本所原庭桃青寺に關係ある寺である所から、その境内に蕉芭堂を建て、積翠の彫つた芭蕉の木像が安置された。然るに累年の風雨に頽廢したので、寛政五年芭蕉百回忌に當り、積翠その頽破を補ひ、萬嶽、桃隣と謀り、春冬の雅遊を開き、なほ芭蕉像の左右に其角、嵐雪の像も建てた。その記念出版が本書である。

茗荷集 茶靜編 文政五年刊 半紙本二冊

江戸に於ける芭蕉の舊蹟、句碑を説明し、末に當時名流の發句を掲げたもの。すべて四十一基。

江都祖翁墳塋集 野桂編 文政九年序 半紙本一冊寫

江戸（地方のも二三ある）に於ける芭蕉の舊蹟、句碑を圖解したもの。野桂の序に、「碑の形り容より文字の書様、左右、脊書まで、老の眼鏡の届く限りうつし留めぬ。云々」とある。實地踏査が値打である。すべて五十九ヶ所ある。一名茗荷圖會とも云。

廣茗荷集 野桂編 文政九年序 大本一冊稿

同前。野桂の序に、「彼書（茗荷集）をもて導となしつゝ、四里四方を尋ねありき、拙き筆もて圖畫し、石の裏表左右に録せし文字迄も寫し取り、或は側見るべきものは審に寫しぬ。……春秋の清うすめる日には、ニヶ所三ヶ所づつめぐりありき、木の根石の端に腰うちかけ、一服の多葉粉に脚を憩め、其行其場の興に乗じて作れる一句の腰折なれど、云々」とあつて自分を記してゐる。墳塋集よりも信じられる。墳塋集は何人の筆寫か知らねど、寫誤多く、圖も亦ぞんざいである。すべて四十三基。

諸國翁墳記 義仲寺編 寶曆刊 半紙本一冊

日本國中の芭蕉の句碑の所在地、建立者、挿繪を入れて説明したもの。寶曆より天保迄三百餘碑に及ぶといふ。

九、傳 書

二十五箇條 京保二十一年刊 半紙本 一冊

芭蕉が去來に與へた傳書だと云はれる。奥書に、「右者俳諧之新式有二十五ヶ條。最我家



之管目也。即於落柿舎自書而與去來。云々。于時元祿七甲戌六月 日、芭蕉庵桃青判」とある。許六が死ぬ十二日前に書いた俳諧指南に、「近年二十五條の秘訣など、去來より相傳したりとして、金銀をむさぼり、知らぬ人をたぶらかす由、沙汰の限り偽にて大うそなり。愚老が宇陀法師選する時二十五條ばかりの秘訣ある由書きくれよと頼む故に書き譯したるものなり。俳諧大秘訣といふは、愚老一人に傳へた朱小二卷の書よりなし。云々」とある。又鶯笠の芭蕉葉ぶねに、「二十五條を貞享式といふ事、いつの世よりの誤にや。是は(二十五條)翁去來が所望により長崎卯七へ記し與へ給ひしものを本として或はおのれ翁に聞き、或は同門に語り給ひし事をも見聞きして書き集め、それにおのれが了簡をも加へて小冊子とし、翁の奥書を贋して正風裁錦と名斷し、賣り歩きたるものなり後におのが一派を立つるに至りて、名題を替へたりとぞ。云々」ともある。是等の説によると本書は偽書である事が分かる。恐らく支考は芭蕉の説に自説を按排して造意したものであらう。なほ本書の註に芭蕉翁廿五條條解(白馬奥儀解)がある。

悟一葉

享保十六年刊  
寛政八年再刻

半紙本 一冊

芭蕉庵桃青著とあるが偽書である。千之の跋によると、家傳本を書肆に乞はれて出版したとある。紀逸の序、清流洞の跋がある。連俳の法式百十餘條を説く、再版本の卷末に、柿園藏書目と題し、俳諧桐一葉抄、五冊がある。

俳諧新々式 刊年未詳 半紙本 一冊

奥書に、元祿六年三月、桃青在判とある。

新式近案の大用を記したるもの。關更の出版にかゝる。芭蕉より許六に傳へ(元祿六年)、許六より雲鈴に傳へる(寶永六年)。

白砂人集 安永刊 小本 一冊

卷初の記によると、本書は紹巴の玄仍に書き與へたものを秘寫したものであると、奥書に元祿六年三月、芭蕉の許六に傳へた由來、寶永六年十二月、許六の雲鈴へ傳へた由來が記してある。連歌の教である。許六の云つた芭蕉より相傳の秘訣二卷とは、此本と前の新々式の二卷とであらう。

錄

附

俳諧相傳名目 半紙本 一冊 寫



奥書に、「右芭蕉翁の遺式無殘令書寫畢、享保九甲卯月十六日。」とある。内容は發句の切字、脇の附方、第三どまり、月花の事、戀の句等十餘條に就て、例句をあげて説いてゐる。蕉門十六篇 半紙本 一冊 寫

奥書に、元祿七年正月、桃青とあるが詳かでない。専ら發句の作法に就て説いてゐる。雪中庵へ傳へたものだと言ふ。

俳諧三部書 寶曆九年刊 半紙本 三冊

俳諧之秘記、袖珍、抄本式並古式の三書を集めたもの。はせを在判とあるが詳かでない。

俳諧之秘記は蕉門十六篇と同一であり、本式並古式は昌球・季吟の説と會庶の心得を述べたものであると。

幻住庵俳諧有色無也、關 明和元年刊 半紙本 一冊

卷初に芭蕉、末に幻住庵三世主人在判とある。内容は姿情・虚實・不易流行・發句五品等十七ヶ條を收める。古風の説に芭蕉の句を引證したもので信じられない。

山中問答、刊年未詳 半紙本 一冊

元祿二年秋、芭蕉が加賀の山中温泉滯留中、北枝に教示した説を、北枝が覺書風に手記したもの、十九ヶ條ある。

附合十七體

北枝に與へた芭蕉の手紙によると、「附合十七體別紙に記進候。云々」とあるから、北枝に教示した説であるが、後初心のまどひになるからと云つて破棄した。それを路通が拾ひ取つて、諸國に賣り歩いたので、同門の物議を惹起した。路通勘當説の種を作つたものである。

高山樂塲への傳

芭蕉が高山傳右衛門（樂塲）へ與へた手紙の中に出てゐる。皆亥の眞澄鏡に掲出、初めは芭蕉が樂塲の句風を批評したもの、以下は古風の法式を教へたものである。相傳の時代は延寶の末か、天和頃であらう。

梅の錠

酒堂が芭蕉から傳へたといふ傳書であるが秘書であらう。風之の俳諧耳底記の序に、亡父



風律膳所の洒堂と親しく、師弟のやうであつた事を述べて、「或時翁在世に、蕉門の未來記として記し置き給へる梅の鎖の秘書を、傳はらん事を望まれけるに、洒堂の曰、さればよ。その書は今に我家に秘め置くとはいへども昔祖翁予に對して、「梅の錠汝と我と鍵一つ」と示し置き給へる書なれば、今日に至りて誰に向ひてか開くべき。云々」とある。芭蕉の名に假記した洒堂の俳書らしい。

## 二、明治以後に成つたもの

### 一、全集

芭蕉翁一代集 筒井民次郎編 明治二十四年刊

巻初に芭蕉傳を掲ぐ。異説がある。頭註に句文の出典を示し、明治初期のものとしては良書である。

芭蕉全集 老鼠堂永機校 明治三十年刊

貝おほひ、田舎之句會、常盤屋之句合、冬の日、波留濃日、野ざらし紀行、鹿島紀行、笈

之小文、更科紀行、奥之細道、曠野、ひさご、嵯峨日記、猿蓑、炭俵、續猿蓑、芭蕉句集  
枯尾花、芭蕉翁文集を収める。

芭蕉翁一代鏡 錦花園玄生編 明治三十一年刊

芭蕉全集 沼波瓊音 大正十年刊

芭蕉の句でないものも入つてゐるが、すべて網羅してゐて便利であるし、巻末索引も付く。編者に訂正出版の意はあつたが成らなかつた。

俳聖芭蕉全集 吉木燦郎編 大正十三年刊

芭蕉全集 石原健生編 大正十四年刊

### 二、傳記

芭蕉庵桃青傳 内田魯庵著 明治三十一年刊

俳諧文庫芭蕉全集附録。後篇は同じく素堂、鬼貫全集附録。良書。

芭蕉翁 雨谷一茶庵著 明治三十四年刊

附

録



松尾芭蕉 國府犀東著 同

芭蕉庵桃青 山崎藤吉著 明治三十六年刊

帝國文學所載のものかと思ふ。

俳人芭蕉 同 大正五年刊

好著であるが、引用文の出典が明記されてゐないから不便である。

芭蕉翁の面影 木津碩堂著 大正十一年刊

詩人芭蕉 萩原蘿月著 大正十五年刊

芭蕉の研究 樋口功著 同

從來の芭蕉傳中の白眉であるが、疎漏な點はあるし、大成的なものではない。

芭蕉亡命の一考察 菊山當年男著 昭和六年刊

芭蕉と藤堂家との關係が詳記されて非常に参考になる。

芭蕉と伊賀 村治圓次郎著 昭和八年刊

芭蕉家系の研究が参考になる。

芭蕉の全貌 萩原蘿月著 昭和十年刊

詩人芭蕉を増補、訂正したものであるが、まだ誤も不備な點もある。版を重ねる度に改善されて行かう。

三、句集、文集

芭蕉翁文集 小林紫軒編 明治三十八年刊

芭蕉翁文集 幸田露伴編 明治四十年刊

芭蕉俳句定本 勝峰晋風編 大正十三年刊

芭蕉年譜、俳句定本、年代後考、作者誤傳、疑はしい句、補遺、引用俳書目録、索引。

芭蕉俳句全集 半田良平編 大正十四年刊

選評芭蕉句集 樋口功著 大正十四年刊

四、註書



芭蕉翁句解大全 松室八千三編 明治二十六年刊

芭蕉俳句評釋 内藤鳴雪著 明治三十七年刊

芭蕉句集講義 角田竹冷著 明治四十二年刊

秋聲會一派の輪講。

芭蕉翁文集詳解 佐藤進二著 明治四十三年刊

芭蕉句集評釋 小林一郎著 大正十三年刊

輯釋芭蕉紀行全集 樋口功著 大正十四年刊

芭蕉俳句新釋 半田良平著 大正十四年刊

新釋奥の細道 木村架空著 明治二十九年刊

新釋奥細道 三宅邦吉著 明治四十四年刊

奥細道詳解 黒澤教一著 大正九年刊

奥細道評釋 小林一郎著 大正十年刊

奥細道新研究 大藪虎亮著 大正十五年刊

奥細道贅註 萩原井泉水著 大正十四年  
奥細道詳解 岩田九郎著 大正十五年刊  
以上の内、大藪氏の研究と井泉水氏の贅註がよろしい。贅註は早稻田文學大正十四年九月  
號掲載、實地踏査の研究が面白い。

五、評論、研究

芭蕉論考 佐藤紅綠著 明治三十六年刊

蕉風 沼波瓊音著 明治四十年刊

芭蕉俳句研究 太田水穂編 大正十一年刊（正續）

瓊音・水穂・阿部次郎・安部能成・小宮豊隆・和辻哲郎・幸田露伴・勝峰晋風等の輪講。

芭蕉を中心として 臼田亞浪著 大正十二年刊

芭蕉 吉田絃二郎著 大正十二年刊

旅人芭蕉 萩原井泉水著 同



芭蕉と一茶 萩原井泉水著 大正十四年刊

昭和十七年十二月五日印刷  
昭和十七年十二月十日發行

(五〇〇〇部)

(出文協承認  
あ二八〇一八二號)

芭蕉の精神

定價 二圓二十錢

著者 萩原羅月

發行者 小澤新藏

印刷者 (東京二二) 大野治輔

發行所 弘學社

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九

振替東京八一八四四

會員番號一一〇〇一三

東京市豊島區集鴨五ノ一〇二三

東京市本郷區駒込曙町二





# 評釋 奥の細道

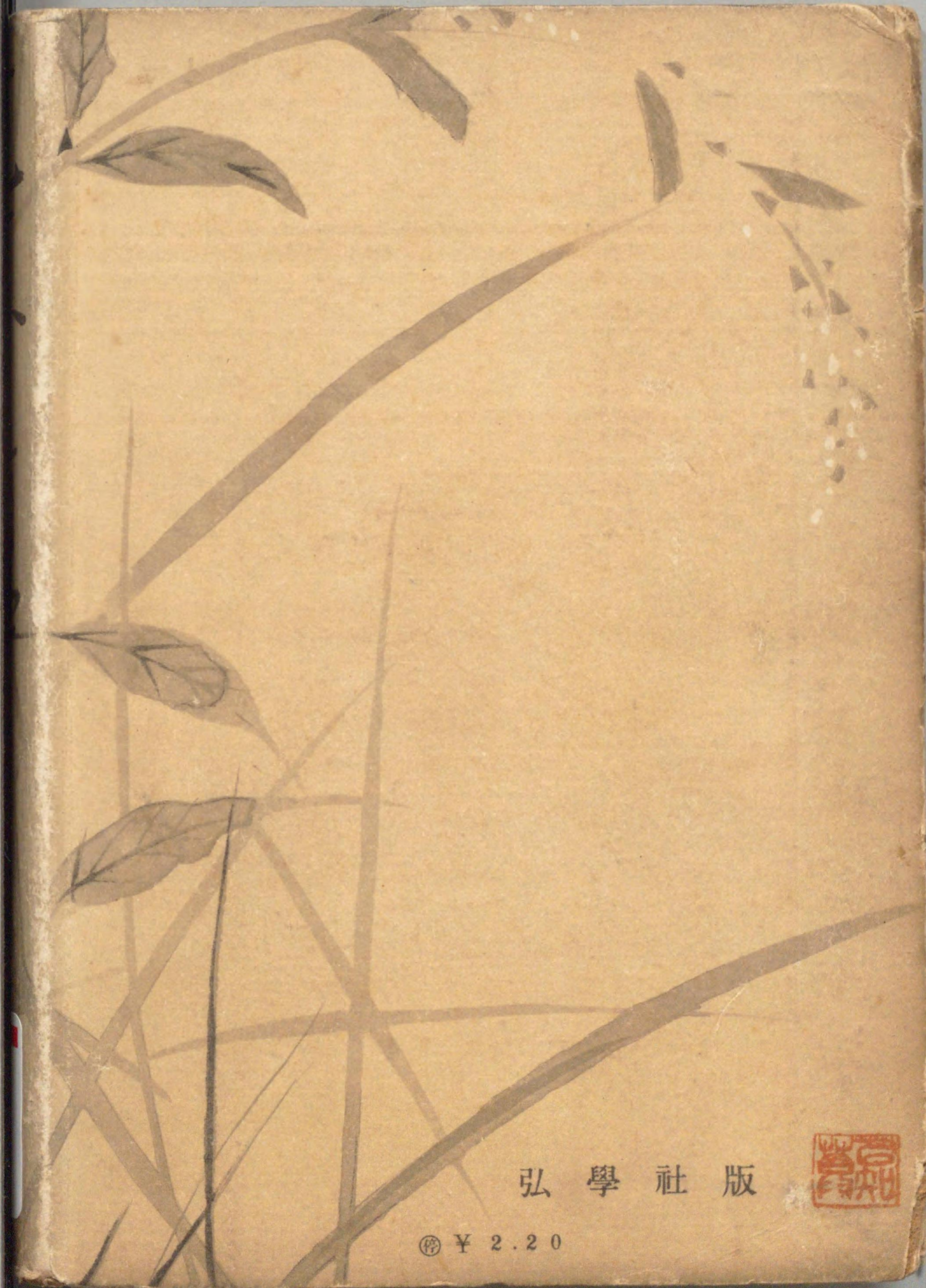
唐橋吉士著  
B六・四四〇頁  
遍歴地圖入  
¥二・二〇(送三〇)

芭蕉が、元祿豪奢の時代に獨りその生涯の大半を寂しい行脚漂泊の間に送り、禪・自然俳諧の「悟」に玲瓏透徹せる心眼の輝きが本書に收められた五十五句と、それを補綴した文章で、卷頭に於ける「奥の細道」の内容、成立、俳諧文學に於ける位置等の略説により概念が把握され、更に全編を五十五章に區分し各章の主眼点を提示し、章毎に語釋・通釋・評釋を施し讀者に對する便宜を與へたもので常に芭蕉を愛し、心に芭蕉を求めつゝある著者の周到なる構成により、俳聖を知る無二の名著で又本書を透し日本精神を一層深く認識されん事を切望す。









弘學社版



© ¥ 2.20